

阿爾麥 笨 老烈 考 (一)

— 出生から内科、外科学位取得まで —

田中英夫

序節 東京府癲狂院建設計画案

明治十六年(一八八三)一月初め、ウィーンで医師会が開催され、その衛生部会で、ヒンメル・サナトリウム病院長のアルブレヒト・フォン・ローレツ(Albrecht von Roretz 以下、ローレツと略記)は、明治初期日本の医学、衛生事情について講演⁽²⁾していた。

……日本の家屋は木造ですから寒気を防ぐには不十分で、僅かに部屋の真中にある火鉢が暖房を受け持っている、といった極く簡

素な造りです。主食は米で、たまさか供される魚貝は御馳走の部類に入るでしょうか。日本人は大変入浴好きですが、それは即、清潔を意味する訳ではありません。年中、昼も夜も同じ衣服をまもっていますし、家族は一部屋に寄り添って雑魚寝しますので、これが家族中に病気が蔓延する原因ともなっています。子供と言えば、大概、十歳位まで母乳を飲んでいますが、全体として、行き届いた養育とはいえません。子供の死亡率はすこぶる高いのです。

とは言うものの、日本は医学、衛生学の分野で、近々、四分の一世紀の間に、信じられない程の、特筆すべき進歩を遂げました。オランダ人、特にシーボルトはヨーロッパ医学を日本人向きに手直ししました。このために、シーボルトの名は日本人の記憶に深く刻み込まれています。

ヨーロッパ医学に対する信頼の念も、それまで支配的であった漢方医学に拮抗して民衆の間に拡まって参りました。そもそも、漢方医学なるものは経験にのみ依存し、全く形式的な制度で成り立っている医学です。ずうっと以前は、誰でもいきなり、ある医師の許へ徒弟として入り込むことが許されていましたし、又、試験も、資格認定も経ずして診療を行うことができたのです。尤、その後は、最年少は十六歳から、中国語、日本語の一定の書物を丸暗記する学習を経た後、試験に合格することが要求されるようになりましたが。……

大学が東京に創設されて、その当時二六人の教授が任用され、修学期間は予科を含め一〇年間とされていました。以後、地方の各都市にも医学校を併設した小病院が設立され始めます。地方病院に併設された小医学校へも、ヨーロッパの医師達——かく申す私、ローレッツも又その一人でありました——が招かれて診療指導、医学教育に当たったのであります。……

明治九年（一八七六）五月、愛知県公立病院及び公立医学講習場へ教師として着任したローレッツ³の本校における事蹟については、『名古屋大学医学部九十年史』（以下『九十年史』と略記）が公刊された昭和三十六年の時点では、『自明治六年至十三年 愛知縣公立病院及醫學校第一報告』（以下『院・校第一報告』と略記）を主資料とし、その他断片的或いは伝聞的資料に基づいて、概略、以下の線まで判明していた。

任期 ヨングハンスの後任として、明治九年五月、愛知縣公立病院・公立醫學講習場教師に着任。明治十二年三月、更に任期一年延長。明治十三年三月に任期を満了し、四月十三日、別離の宴が催された。

学制 着任以来、ドイツ語による授業が開始されたが、天王崎に院・校が新築された明治十年七月から翌十一年一月までは休校とし、この間に一般規則、学則を改正、新入生（区費生三二、自費生三四）の募集、在校生の試験による級分け、教員の専門別分担等の第一次改革を行った。次いで第二次改革として明治十二年六月、就業年限を三年から四年に延長し、医学校としての学制を確立した。

講義 前掲『院・校第一報告』中の学料表によれば、正規の時間帯でローレツの行った講義名は、「内科臨床講義」「外科臨床講義」「外科通論」「婦人病論」「産科學」「梅毒皮膚病論」「斷訟醫學」と明らかであるが、何れも講義録は発見されていない。

著述 『醫事新報』創刊（明治十一年七月）、但し、同誌は一冊も発見されていない。

『虎列刺病豫防報告』（明治十年十月）

『虎列刺病新誌』（明治十年十月）

『皮膚病論一班』（短期講義の講義録）（明治十三年三月）

建議 汚水排導法の建議（明治十一年一月）

衛生警察医官ヲ設クベキノ建議（後藤新平經由）（明治十一年十月）

癲狂院設立の建議（明治十二年一月）

〔何れも愛知縣令宛〕

施設 解剖局棟の建設（明治十年十月）

汚水排導溝の敷設（明治十二年五月）

これらの事蹟は内容に不明の部分が多く、把握し得たのは露呈した幾つかの点を繋いだ輪郭に過ぎなかった。とは言え、その任期延長を懇願させずにはおかなかつたローレッツの学識人格、西欧近代的医学教育体系の地方医学校レベルへのアレンジ、著述・建議からうかがわれる広範且つ先進的な医学上の見識、日本では全て鐫矢的存在となつた諸施設の実現、何れを取つてもローレッツと言う人物のスケールを彷彿とさせる事蹟である。しかし具体的には、ローレッツに関する基本的な事柄——フルネームの原綴り、出自、生没年——すら不詳であり、ローレッツの人間形成に決定的な役割を果たした出身ギムナジウム、出身大学も、取得学位も不明であつた。

従つて、ローレッツが移植しようとした近代的医学教育体系がヨーロッパの何処のそれであるのか、ローレッツの講義した各々の講義がどの学派の誰の系統を引くのか、等の基本的知識抜きで愛知県公立医学校のカリキュラム、講義が論ぜられてきた。又、ローレッツ自身、当時の日本の医学状況をどのように捉えていたか、前任教師、各教諭、医学校生徒の勤務状況や学習態度をどう観ていたか、そして、その与えられた条件の中で具体的に何をしようとしていたか、などのいわば核心的資料も皆無であり、資料上、推論の基盤を欠いていた、と言えよう。

更には、ローレッツの来日は全く個人的な関心、冒険心に由来したのか、オーストリー・ハンガリー帝国の命により公的使命を帯びて派遣されたのか、とすればその使命とは何であつたか、全く不明である。そして、明治九年四月、愛知県吏加藤純真が第二のお雇い外人をスカウトするために上京したが、誰に依来し、誰の斡旋でローレッツと契約するに至つたか、その経緯も一切判明していない。

明治九年五月、オーストリー貴族でローレッツという名の医師が、訳官司馬盈之を伴つて、名古屋の医学校に着

任した。僅か四年の間ではあったが、彼は医学の、その何れもが今日の眼から見ても瞠目すべき種子を蒔き付け、その成果を刈り取る間もなく、ラテン語箴言一条を遺して故国へ帰った。風の便りによれば三十有余の短命でこの世を去ったらしい、とローレツを半ば伝説化していたのが、昭和三十六年当時、名古屋の地での認識であった。

『九十年史』公刊後は、地元の安井広、大阪の藤野恒三郎、山形の佐々木仁一、小形利吉・利彦父子、新潟の小関恒雄、オーストリアのエーリッヒ・ラブルらによって、断片的ではあるが多面的に、医学史、あるいは地域史としての研究が進められ、以下に述べるような新資料、新事実の発掘があいついだ。

ローレツの出自、医学教育観

なかでも、山形の佐々木仁一、小形利彦の現地調査④によって、ローレツ家の墓碑、居城の存在が確認されたこと、小関によってローレツ自身の寄稿文“Medizin und Unterrichtswesen in Japan”が *Wiener Medizinische Wochenschrift*^⑤から発掘されたことの二つの意義は大きい。現在の我々はローレツの正確なフル・ネーム、生没年、出自を知り得、且つ、ローレツ自身の口から、愛知県公立医学所、公立医学校の説明——前任教師ヨングハンス対する酷評、助手たちの期待外れの能力、貧弱な蔵書、素読に終始するだけで、何の予科知識もなく無論本科知識も零に等しい生徒達を前に、途方にくれながらも、病院の諸設備を整備し、医学書の収集に努める有様について、「外国人が何年もの歳月を要した研究を凌ぐためには、日本人にも同じくらいの時間がかかるということを、彼らには到底理解できないのである」などの慨嘆まじりに——を受けることができるのである。

講義

ローレツが公立医学所のカリキュラム改革を計ったのは、病院、医学所の天王崎に新築移転された明治十年（一八七七）以後であり、翌々年の明治十二年（一八七九）三月、横井信之が公立病院長、公立医学校長として着任し、

同年六月に至って、就学年限は三年間から四年間に延長された。公立医学所、公立医学校時代を通じて、恐らく、全学科がローレツの指揮の下に講ぜられたと思われるが、ローレツが直接講義したのは、前述したように正規の時間帯では、内科、外科双方の「臨床講義」、「外科通論」、「婦人病論」、「産科學」、「梅毒皮膚病論」、そして「斷訟醫學」の七講義であった。^⑥昭和三十年代半ばまでは、世に知られたローレツの講義録は、短期間（明治十二年（一八七九）六月四—十二日）の講義を採録した『皮膚病論一斑』のみであったが、『九十年史』編者をして「その一部を寓目することを得ない」と歎かした本学初の学術雑誌『醫事新報』^⑦が、一宮市森家で発見されたことから、その『醫事新報』に連載されていた正規講義の講義録「斷訟醫學」が、小関恒雄、安井広によって世に紹介された。^⑧又、山形での講義録ではあるが、「顕微鏡學」^⑨「藥劑學」^⑩も世に頭れている。

諸建議

一方、対社会的活躍については、今日に残された幾つかの建議書によって知られている。その諸建議書の一つは「衛生行政」に関する系列であり、今一つは「癲狂院」に関する系列である。後者については、明治十二年一月の愛知県令宛の癲狂院設立の建議書が夙に知られた所であり、その実践としての本公立病院内の小癲狂棟落成と併せ、ローレツの精神医学觀の先進性が識者によって着目されて来た。

衛生行政についても、単に本公立病院内や愛知県内に止どまらず、愛弟子の後藤新平を介して日本の衛生行政の確立に寄与した点に、我々は留意しなければなるまい。

昭和五年、後藤新平の伝記を作成するため、後藤伯爵家に保存されていた膨大な文書類が「後藤新平伯伝記編纂会」に提供されたが、現在この資料の殆どが水沢市立後藤新平記念館に蔵されている（伝記編纂後、若干の資料が流出し、その一部は順天堂大学山崎文庫中に在る）。この水沢の記念館所蔵文書は昭和五十年、雄松堂によって

「マイクロ・フィルム版 後藤新平文書」として市販され、本学でも中央図書館に架蔵されるに至った。本資料は、日本の近現代史、政治史に関する一級資料であればこそ、商品化されたのであろうが、名古屋大学の創世記にいささかなりと関心を抱く者にとっても垂涎の資料であった。

幸い、筆者はこのマイクロ資料「名古屋時代」のリールの中に、明治十二年六月二十七日付、東京府病院長長谷川泰宛の「東京府癲狂院建設計画案」（以下、「計画案」と略記）とでも言うべき書簡形式の答申——「愛知縣醫學校」用箋七〇丁に毛筆でしたためられた翻訳下書き——と、この「計画案」に対応するローレツ自筆と目される平面図草案を含めた一連の図面を見出すことができた。この年の一月、愛知県令宛に提出された癲狂院設立の建議書に比し、「計画案」と各種図面からなるこの資料は、遙かに詳細且つ具体的で、建議書の応用実践編とも言えよう。

ローレツから長谷川泰宛の書簡形式の答申としては他にも「澳土利國維也納醫制」が山崎文庫に在り、ローレツと長谷川泰との関りには強い関心を持たされるが、今の所はその関係を証するに足る資料は、この二つの答申（翻訳下書）以外に見出せないでいる。

しかし、長谷川泰がローレツに何を問うたかの趣旨は、ローレツの「計画案」から逆に遡求することが可能であるし、又、長谷川泰及び東京府がローレツの進言をどのように取捨選択したかを検証することは、ローレツの描いた平面図と明治十四年（一八八二）八月に向ヶ丘に落成した実際の東京府癲狂院の平面図とを比較検討することによって、少なくとも、大略は可能となろう。

東京府癲狂院が発足したのは明治十二年（一八七九）であるが、その発足月については六月、七月、十月の各説がある。しかし何れの説にしても、制度上の発足を何月と見るのが妥当であるかという見解上の相違であり、この

時、その癲狂院の実態までもが改新された訳ではない。特に、收容された患者と、患者を收容した病棟——ツェルレ(Celle 独房)式——は上野の養育院のそれをその儘引き継いだに過ぎなかった。⁽¹²⁾ 当時の状況を呉秀三は次のように述べている。⁽¹³⁾

……非常ニ錯乱セル患者アリテ自己の糞尿ヲ塗抹翫弄シテ臭気甚シク室内及ビ衣服ノ不潔ヲ極ムルモ掃除ノ定日來ラザレバ觀過シテ手下サズ極端ニ言ヘバ恰モ動物ヲ飼養スルノ觀ヲナシタリト謂フ……患者ハ或ハ鎖ニツナガレ或ハ手錠足錠ヲ施サレタルアリ病室ノ取締方モ推察セラル^マナリサレバ病室内ニ於テ自殺者頻繁ニアリ又看護夫ガ患者ニ通ジテ之ニ孕胎セシメシコトナドモ旧記中ニ見エタリ……

東京府庁が府内に癲狂院を新設する意志を固めたのは、明治十二年三月頃とされるが、ローレッツが東京府病院長としての長谷川泰に回答した「計画案」の日付は同年の六月二十七日であるから、ローレッツに対する諮問は恐らく、春四、五月の頃であったと思われる。前述した「澳土利國維也納醫制」の答申日付も、やはり、この明治十二年の二月であることから、この年の二月から六月にかけての五カ月を核とする約半年については、両者が関ったことを資料上確認できる。従ってこの年の一月、ローレッツが愛知県令宛に上申した癲狂院設立の建議書に長谷川泰が着目し、ローレッツ諮問に及んだ可能性もあろう。

「計画案」の詳細な記述を吟味すると、長谷川泰の諮問は次のように読み取ることができる。(引用文は「計画案」より摘出)。

一、建設工事費予算は二万円を上限とする。

原ト二万圓ノ定額ヲ以テスレハ更に之ヨリ便利ニスルヲ能ハズ

一、收容患者数は有償五〇人、無料五〇人、計一〇〇人とする。

閣下ノ言ノ如ク東京ニ癲狂院ヲ設ケ百人ヲ入レ中五拾人ヲ費用ヲ償フ患者トシ五拾人ヲ施療患者ト為スルハ左ノ法ヲ以テ可トセン……

一、癲狂院として左の何れが最適地か。

目黒ノ地……就中舊松平主殿守或ハ松平能登守ノ邸傍ノ丘陵……

舊尾州藩及紀州藩邸宅ノ間ニ在ルノ地……

紀州藩ノ全邸ニ其近部ノ田地……

牛込ノ地及道灌山ノ地……

不忍池上ノ加賀邸ニ近接スル地……

一、建築設計は誰が適任か。又、洋式建築を日本人が施工することに危惧はないか。

癲狂院ヲ建築スルハ最モ緊要ナル一難事ニシテ熟練ノ建築家ヲ要ス予思フニ此建築ノ任ニ當ル者ハ頃日東京永田町ニ獨乙公使館ヲ建築セシ作家其ヲ可トセン……而メ皇國人ニ造営セシムルヲ可トスル所以ハ……

以上の前提で、敷地全般の造園計画、建物の規模、配置、構造等々全ての具体的構想はいかにあるべきか、を

問うたのが長谷川泰の諮問であるが、これに対するローレツの回答は、根元の精神病療法のシステムから説き始められる。

往古ノ如ク専ラ暴力ヲ用ヒスシテ頗ル平穩處ノシレストライント、システム置ヲ行フニ及ベリ蓋シ是ニ於テ始学マテ上ニ適セル療法ヲ加フルニ至レリ……

そのシステムの一つは

「ベルギー」ノ「ゲール」ト称スル一地方ニ於テ有名ナル癲狂者ノ移住地アリ茲ニ於テハ此地ノ癲狂院ヨリノ患者ヲ五六里ノ隔地ニ送り其地ノ農民ニ委シ一定ノ法則ニ由テ之ヲ取扱ハシム……

システムであり、今一つは

医学士「ムンゼー氏ノ創設セシモノ……田園ニ於テ許多ノ家屋ヲ散在シテ設立シ毎戸其家主ヲシテ看護人タラシメ毎屋一至シ名ノ患者ヲ入レ常ニ這看護人及其家族ヲノ之カ係護マツ及取締ヲナサシム……

システムであるが、両システムは次の三点で実現は容易ではない。

(第一)其費額ノ巨大ナルヲ

(第二)甚タ隔離セル許多ノ家屋ヲ一手ニ統轄シ適宜ノ医治ヲ絶スノ難キヲ

(第三)看護人ノ患者ニ對シ治療上ニ損害ナリ且ツ粗暴等ノ取扱方ナリ百事忍耐シ勉テ懇切ヲ旨トシ能ク其任ヲ竭スモノを得ルヲ

ノ難キ是ナリ……

そこでローレツは、両システムで採られている患者を一定の地に移住集結せしめる「移住法」の長所を生した改良「移住法」を、第三のシステムとして提案している(以下、引用文中の「移住法」とは、この改良「移住法」の意であろう)。

其法大癲狂院ヲ設立シ其内ニ於テ職工場花園牧畜所田畝等ヲ設ケ興奮シタル患者ヲ平穩ナル患者ト區分スル等ノ「ニ供ス……

第一 移住法ニ於テハ患者頗ル健康ヲ得ヘシ是即チ廣潤ナル土地ニ於テ分離住居スルヲ以テ傳染病等ノ虞ナキモノナリ而シテ今此利益ニ擬スルニハ廣大ナル病室ニ廣キ庭園アルモノヲ建築シ或ハ「ハビリオン」を建築スベシ……

第二 移住法ニ在テハ患者大ニ安靜ヲ得且ツ市街ノ喧鬧ニ遠ザカルカ故ニ病ニ治癒ニ甚ダ利アリ……

第三 移住法ノ利益ハ又患者ヲシテ一定ノ操業ヲ得セシムルニアリ而シテ之ヲ實際ニ徵スルニ操業殊ニ其体力ヲ勞スルモノハ精神及ビ身軀上鴻益アル「欠字」確然タル所タリ即 業セシムルハ患者其神氣ヲ散シ生活ノ愉快ヲ覺ヘ以テ精神ヲ一變スル」ヲ得ヘシ

……

この改良「移住法」の実現には、まず閑静広大な用地の取得が絶対条件となる。

這院ヲ閑静ノ地ニ設クルハ三般ノ益アリ即場所ノ廣大ノ地ニ得ルト其價ノ廉ナルト及高燥ノ地ヲ得ルニ便アル是ナリ……

又廣地ニアルハ随意ニ造築ヲ得且ツ庭園或ハ田圃ヲ設ケ耕作ヲ為シ或ハ鳥獸等ヲ養フニ便アリトス……

殊ニ英國癲狂院ニ於テ患者ニ成績アルハ畢竟他ノ癲狂院ニ比スレハ其地ノ頗ル廣大ナルニ由ル者ナリ……

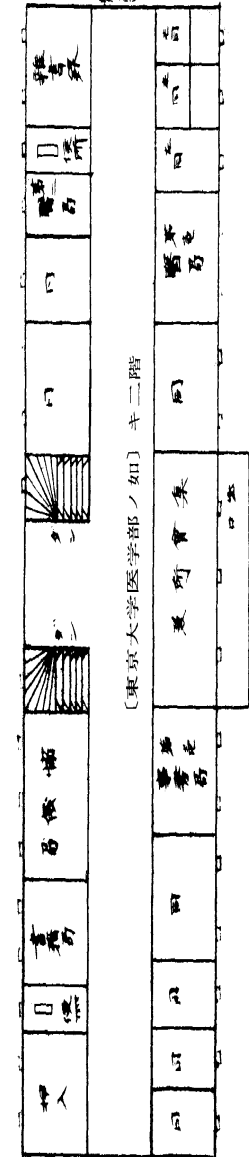
この見地から長谷川泰の挙げた各候補地については、目黒の旧松平主殿守か松平能登守の邸傍が最適で、紀州藩邸や牛込の道灌山がこれに次ぐ、忍池上の加賀邸に近接する用地は「喧鬧」の地故、不可と断じている。

建築家については、前掲のようにドイツ公使館を設計した「工作家某」を挙げ、その理由として「過般其圖式ヲ一閱セシニ簡便ニシ且ツ其價モ廉ナルヲ以テナリ」と述べているが、「某」については未確認である(少なくとも日本近代建築史の概論レベルで登場する建築家ではない)。そして「某」建築家と協議の上詳細な図面が作成されれば、日本人業者による施行は「可」であり、和洋混合の建築とならざるを得ない現況(当時の状況)ではむしろ利点であると観ている。

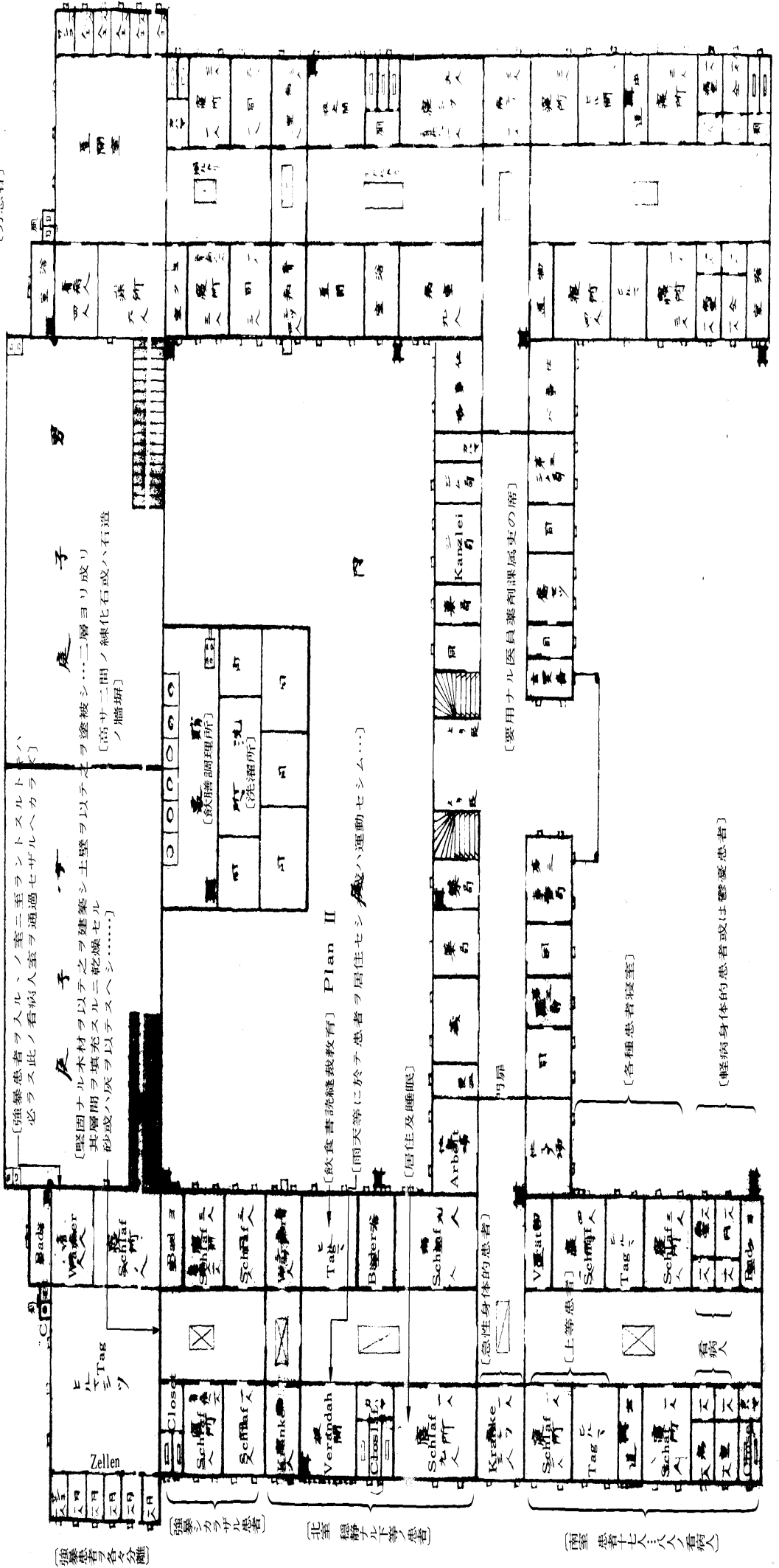
今予ノ呈スル圖式ハ固ヨリ概略ナレハ其建築ニ於テハ宜ク前建築者ト協議ノ上精細ナル圖式ヲ製スベシ然ルモ皇國ノ建築家ニ命ズルモ亦容易ニ造営スルヲ得ヘシ而シテ皇國人ニ造営セシムルヲ可トスル所以ハ和洋ノ風ヲ混合シ以テ便且ツ廉ニ建築スルヲ得ヘク察スレバナリ

予算 二万円、收容患者数 一〇〇名の改良「移住法」に則った癡狂院の具体的構想についてローレツは、フリーハンドで庭園、農耕地を含めた敷地全体の配置図、建物の平面図を描き、「計画案」の中で動線に沿って逐一解説している。なお、平面図には原図(図I)と和訳室名を付した浄写図(図II)とがあるが、原図は図中の室名が手馴た筆記体ドイツ文字(一部ローマン文字も混入)であることから、ローレツ自身のペンによるものと断じてよいであろう。但し、原図右半分は、日本人の誰かによって、輪郭が毛筆でなぞられ、且つ、和訳された室名が記されている。

ローレツ解説文の全てを紹介するだけの紙面上の裕りがないので、浄写図を重ねて、筆記体室名の翻刻、及び説明文の一部を印字した、いわば、加工図面(図III)を次頁に掲げた。



〔男患者〕



〔女患者〕

〔四十七人ノ患者...
六人ノ急性的患者...
十四人ノ看病人〕

この「計画案」と『病院平面之圖貳』と題した一連の図面(敷地図、平面図、部分詳細図等)を長谷川泰が受理したことを裏付ける書簡などの直接的な資料はまだ見出し得ないが、前述したように、明治十四年(一八八一)八月に落成した東京府癲狂院の平面図との対比によって、その影響の程を確かめてみたい。

用地

建築用地についてはローレッツが、

不可ナリト察ス如何トナレバ病院ニ近接シ且ツ喧鬧ノ地タレバナリ然レモ或ハ医学^マヲ生徒ヲシテ毎日這院ニ通学セシメ「フシヒアトリー」ノ受業ヲ得セシムルノ目的ヲ以テ這地ニ建設スル」アルベキモ恐ラクハ其功害相償ハザルヘシ

と候補地中最下位の評価を下した「不忍池上ノ加賀邸ニ近接スル地」とほぼ同地点の加賀邸内となった(現本郷区向ヶ岡彌生町二番地、東京大学農学部所在地)。東京府会決定⁽¹⁶⁾という行政上の結論であった。

規模

工事費は二五、五五五円二〇銭六厘で二割五分増。収容患者数一五〇名で五割増⁽¹⁶⁾。工事費二万円という数値は長谷川泰の個人的目安でもあったのか、岡田の調査⁽¹⁷⁾によってもその財源の規模、及び財源変遷の状況は判然としない。収容患者数の増加については、明治十二年三月の東京府会の予算説明の段階では、収容患者の約百名を想定していたものが、明治十三年四月には旧東京府癲狂院の収容定員が一三〇名⁽¹⁸⁾に達していた実情に応じたもの

と推測される。

吳秀三は向ヶ岡に移転したこの癲狂院各棟の敷地内配置、各棟の間取りを次のように概述している。⁽¹⁹⁾

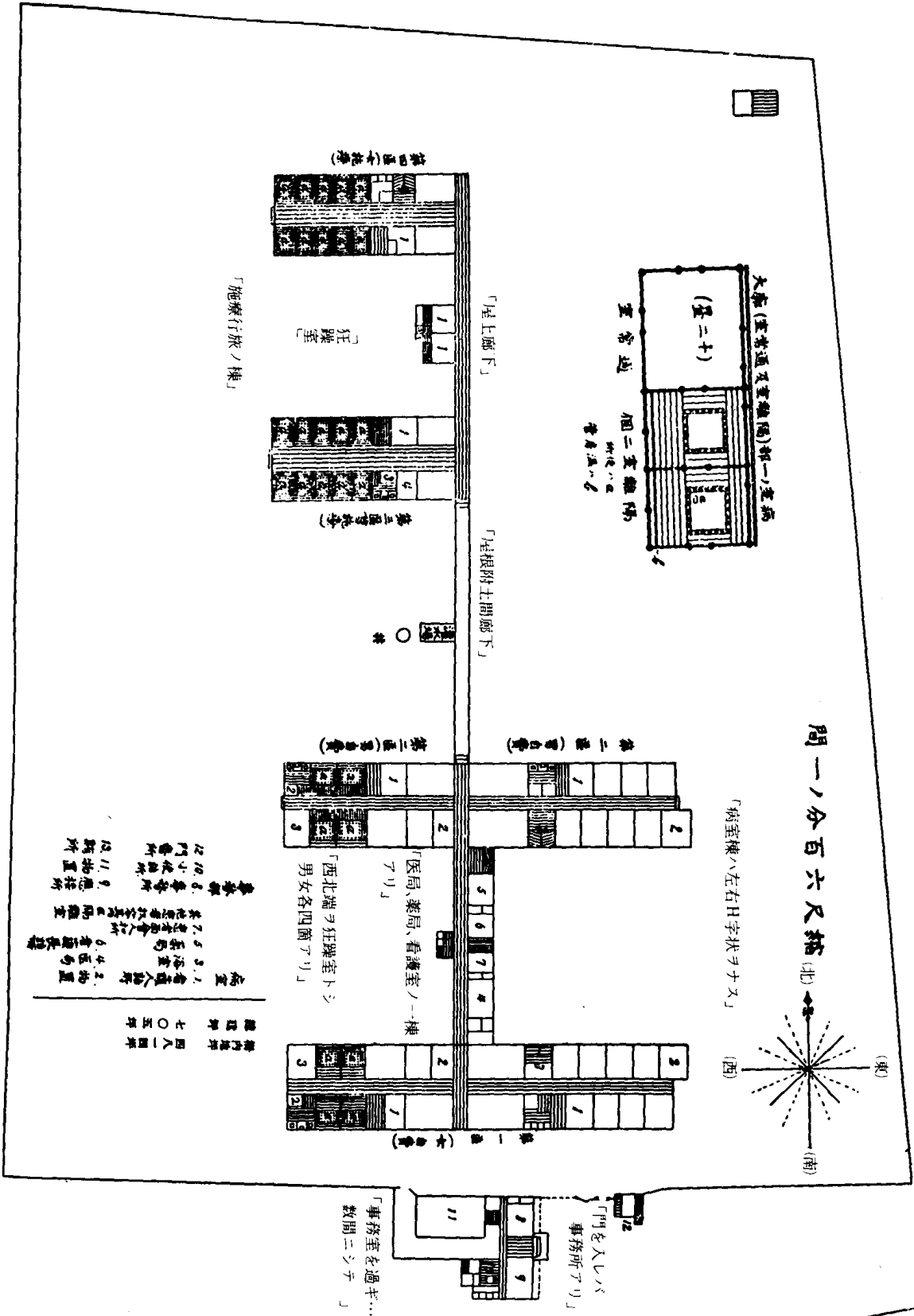
門ヲ入レバ事務所アリ應接所、倉庫、小使部屋、賄所等アリ之ト柵ヲ隔テ、病室アリ即チ事務所ヲ過ギ柵ヲ入り數間ニシテ醫局、藥局、看護長室ノ一棟アリ廊下ノ一端ニ接シテ病室棟ニ入り病室棟ハ左右H字状ヲ、ナス其第一横畫ハ自費女室ニシテ第二横畫ハ自費女室ナリ中央ニ廊ヲ取り之ヲ挿ミテ病室アリ病室ハ通常男女各五箇上等男女各六箇アリ室内ハ白堊壁六疊(九間)乃至十二疊數(二間)ナリ各棟ノ西北端ヲ狂躁室トシ男女各四箇アリ女自費室中二室ヲ以テ施療患者ノ沈靖回復セルモノヲ容ルニ充ツ第二横畫ノ中央ヨリHノ縦畫タル廊下ヲ(西南ヨリ東北ニ向ヒテ)出ヅレバ長十間許屋根附土間廊下アリ猶ホ其延長トシテ屋上廊下アリ此ヨリ鍵手ニ西北ニ向ヒ施療行旅ノ棟ヲ造リ男女各一棟アリ自費病棟ト同ク中央ニ廊下(自費室ニ於ケルヨリモ廣ク一間幅ナリ)ヲ設ケ室ハ其ノ兩側ニ並列ス室ハ自費室ト構造同クシキ但通常病室(男女各二箇)ハ其ヨリモ廣ク狂躁室(男女各十箇)ハ稍狹隘ナリ

※「男室」の誤植

次図(図IV)は向ヶ岡の東京府癲狂院平面図(『我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設』／吳秀三 精神医学神経学古典刊行会 昭和五十三年 附図)に吳秀三説明文の一部を印字した加工図面である。

図IVにみられるように東京府癲狂院各棟の配置は、独房を横に連ねただけの旧上野癲狂院とは平面構成上だけでも雲泥の相違がある。(一)事務管理棟を正面に据え、(二)片翼に男子病棟、片翼に女子病棟を対比させたH字型構成とし、(三)男女各々の病棟の中心線上に中廊下を通し、左右に病室を配し、しかも、(四)その部屋割は、男子病棟と女子病棟とが完全に左右対称となっている。この平面構成上の骨格はローレツの構想どおりであり、特に男女各病棟中央部の浴室、便所、大部屋三室、物置の組合せに至ってはローレツ「計画案」の引き写しである(図V)。一方差異点としては、①事務管理棟の縮小、②施療(無料)患者棟の隔離別棟化、③寢室と昼間室との区分や、

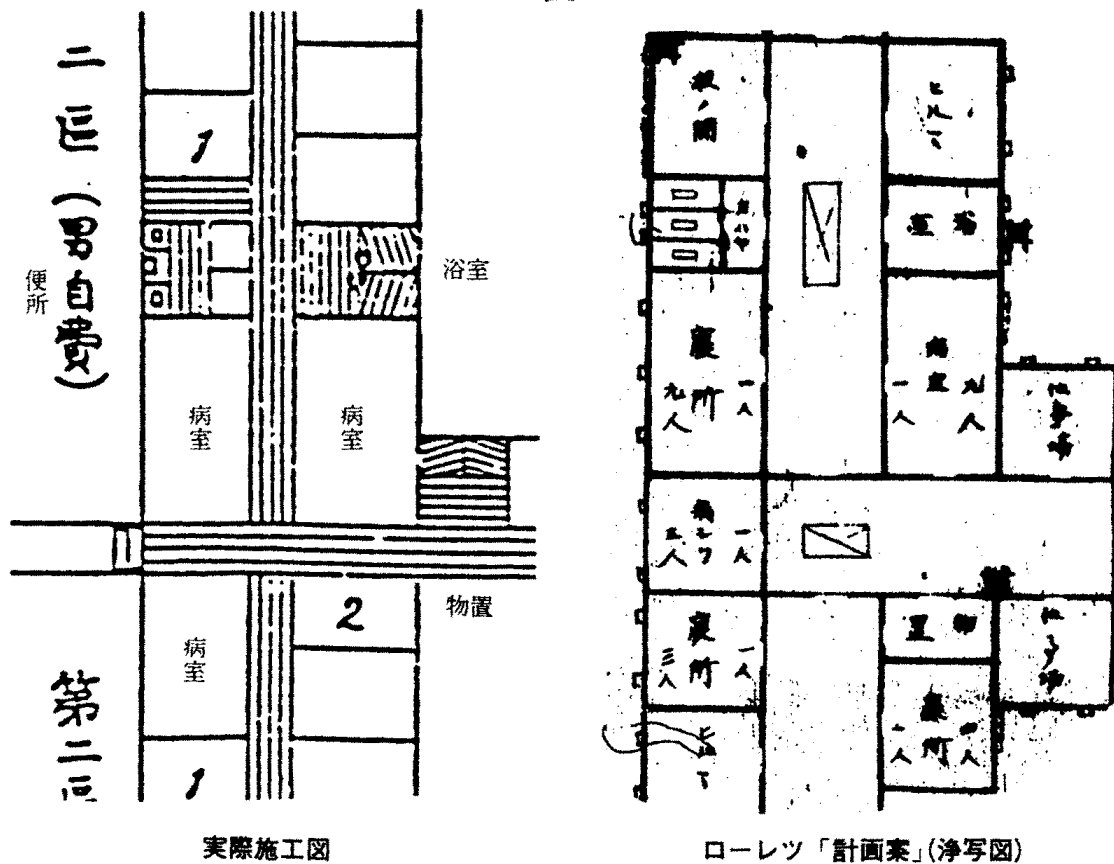
図IV



板間室の不採用、④男女別運動用庭園の不採用、⑤看護人室の減少等が指摘できる。①については、東京府の関係者が、医師の執務管理体制、病院の経営、運営機構、事務組織といった病院管理機能を、ローレツに比すれば軽視していたことを意味し、②については、日本人の最下層に属する人々が主体であった治療(無料)患者に対する身分意識が反映されたものである。しかし重大なのは、③から⑤についての、単に彼我的生活習慣の相違だけに帰せられない決定的と言ってよい差異である。③④⑤は、結果として、ローレツの意図した肝心の診療システム——作業療法、運動療法、多数の看護人による行き届いた介護——つまり、「平穩處置」^{ノンレストライント、システム}がこの時点では全く顧られなかったことを意味しよう。

男女別運動場が設けられたのは、この時より五年後の明治十九年、癲狂院が巢鴨に移転した際であり、この巢鴨の院長呉秀三が患者に対する一切の強制具の廃止を指示したのは、更に十五年後の明治三十四

図V



實際施工図

ローレツ「計画案」(浄写図)

年であった。

この「計画案」の核「ノンレストライント、システム平穩處置」(non restraint system)については、既に明治十二年一月、愛知県令宛の建議書においても、

有名ナル「コノリー」氏(發狂患者、養護)が「ノオーン。レストレイン。システム」(東縛阿責セサル方法ノ義ニシテ「コノリー」氏ノ法革命ノ首唱者)が「ノオーン。レストレイン。システム」(ノ此説ヲ唱ヘシハ即一千八百三十九年ニ在リ)ノ説ヲ創唱セシ以還精神病患者ノ療法ニ於テ一大革命ヲナシ其方法ノ忽チ良途ニ進歩セシハ一朝ニシテ千歳ノ功績ヲ得シト云フモ敢テ誣言ニ非ザルナリ

と口を極めて推奨しているように、ローレッツは機会ある毎に、コノリー(John Conolly 1794～1866)の患者に付する強制具を否定した無拘束制度——今日にいう生活療法、環境療法、作業療法——を我国に導入しようとしたことは疑いないが、何故か、同じく無拘束制度を推奨していたドイツのグリージンガー(Wilhelm Griesinger 1817～1869)に言及した建議書はない。又、ウィーン大学での師マイネルト(Theodor Meynert 1833～1893)についても、僅かに、『斷訟醫學』の中で「神経系統ノ病理ニ於テハ宇内第一等」と紹介しているに止どまる。

愛知県令宛建議書でローレッツが挙げた精神医学者達、「ピネル」(Phillippe Pinel 1745～1826)、「イスキューロル」(Jean-Etienne-Dominique Esquirol 1772～1840)、「パリゼー」(Parigeter?)、「ハムスラム」(John Haslam 1764～1844)、「ハラメン」(原綴不詳)、「コノリー」らの名前を連ねるこの路線は、まぎれもなく、現代精神医学教科書で説かれているフランス啓蒙思潮に端を發したフランス学派からイギリスの人間愛主義者フィランソロピストに至る、近代精神医学史線上の一区間であろう。現代の日本ではピネルとコノリーの二人のみを概説することで精神医療史の夜明けを叙述しようとする通史(22)すら存在する。

このローレツの、一世紀後の今日と変わらない精神医学に関する先駆的な見識は、その母校ウィーン大学ではなく、ヨーロッパ遊学期間に培われた公算が大きい。

予ガ遊學中或ル文明國ニ於テ見シ所ノモノト頗ル巡庭スル所アリ……⁽²³⁾

……予先年我本國政府ノ命ヲ受テ遊學セル機會ニ投シ大約三十ノ癲狂院ヲ訪ヒ自ラ歴驗セシ所ナルヲ以テ……⁽²⁴⁾
多年英佛諸國ニ遊學ノ得タル所ノ智徳ヲ以テ……⁽²⁵⁾

次節で触れるが、ローレツは一八七一年の夏学期をもって正規生として五年(十学期)の課程を終え、その翌年の十二月に内科学位を取得するが、約三年後の一八七四年八月には更に外科学位を取得し、直ちに(九月頃か)アメリカに渡り、十一月か十二月には既に日本に達していた。この内科学位取得から外科学位取得までの間、一八七一年十月―一八七四年八月の間の約三年は、無論、内科学、外科学の研修にも費やされたであろうが、政府命令による英仏遊学にも何ヵ月かが当てられた可能性が高い。

ローレツのこの「計画案」は単に平面図だけに終始するものではなく、外壁、隔壁、扉の構造、ランプのデザイン、室内のペンキの色から、鍵、錠前の小物に至るまでの詳細設計図に及ぶ(残念ながら欠落丁が若干ある)。又、附録として「患者、操業」「看病人ノ職務」「醫士及ヒ生徒ノ職務」にも言及し、果ては、東京府癲狂院のシンボル・マーク(図VI)―「焼印或ハ目標」までをデザインしている。そのデザイン(スケッチ)は平面図原図上と鍵詳細図上に見られるが、ローマン文字A F I Tを組合せた意匠である。Tokio-Fu Iren Anstalt(東京府癲狂院)と読める。

明治十三年三月、ローレツは東京府癲狂院に先馳け、愛知県公立病院構内南隅に、極めて小規模(病室二、看護医室一、看病人室二)ではあったが、本邦初のヨーロッパ式小癲狂院棟を実現させた。長谷川泰も東京府癲狂院のミニチュア版と観て、或いは、訪れたかもしれないが憶測の域を出ない。

図VI



少なくとも本学においては、昭和三十年代までローレツは伝説上の人物に近い存在のままであり、同四十―五十年代もその研究・調査は無為に過ぎたが、学外では、特に山形、新潟ではこの時期、現地調査、翻訳を含めた積極的な研究活動が展開されてきた。この節の冒頭で紹介したように、まず、墓碑、居城が確認された。ローレツ自身の寄稿文・報告文は現在、医学、地理分野等併せて六編が書目上判明している。又、ローレツの叙勲関係文書が確認され、長谷川泰宛の詳細な答申も合わせて二点となった。

特に、長谷川泰宛の東京府癲狂院建設「計画案」は、ローレツが単に、名古屋或いは山形の地方医学校のお雇い外人教師と言う枠組みの中でのみ論ぜられる存在ではなく、地方の枠を超えた日本の、近代医学黎明期と言う枠の中で論究すべき存在であることを、証するに足る内容を持った新資料と考えられる。

しかしこのことを論求するには、ローレツの医師、医学教育者として内実を可能な限り正確に把握することが前提となろう。

次節――第一節では、ローレツの人間形成に殆ど決定的な役割を果たしたと言ってよい、出生からドクトル学位取得までの時期を、極めて限定された資料に拠るよりほかなかったが、可能な限り掘り下げてみた。

第一節 形成の土壤 ビルドダウンク

一 出自

一八四八年、ウィーンでは「青きドナウの乱痴気」革命⁽²⁷⁾、三月革命の火が一瞬、燃えさかった。革命前後の「奥地利」^{ステンレイキ}について『米欧回覧実記』は、次のように簡潔に叙している。⁽²⁸⁾

○抑^{そも}奥^{オオ}国^{オオ}ハ、貴族最モ多ク、貴榮ノ国体ト自負スル国ナレハ、人民一般ノ自由ハ、甚タ渋鈍ナリシ、一千七百八十九年、仏国初度ノ革命ヨリ、自由ノ論ハ、欧州ヲ波動シ、日耳曼各国、封建ノ余習ヲ破リタレトモ、奥国ハ宰相「マッテルニック」氏、「アルプス」「エルス」ノ山脈ヲ長城トナシ、他国ノ説ヲ拒絶シ、君子專治ヲ主トシ、四十余年間ハ、依然トシテ旧政ヲ保続シタリシハ、今ニ至リテ国歩ヲ妨ケ、工商不振ノ原因トハナリタリ、故ハ各国立憲政体ニ変更スル粉^{こな}紘^{けん}ノ際ニ於テ、此国ノミ、官吏培^{ばい}克^くシ、僧侶^{ほし}權^{けん}ヲ擅^{しん}ニシ、人民思想ノ自由ハ、苛禁ヲ以テ之ヲ鉗^{けん}制^{せい}シ、工芸貿易モ、自由ヲ制セラレ、下ハ厚^{こう}斂^{れん}ニ苦シミ、貴族ハ封建ノ夢ヲツムケ、国脈委靡シ、西北各国トハ全ク別世界ヲナシタリシニ、一千八百四十八年、仏国再度ノ革命ニテ、其波動^{うお}竟^{けい}ニ奥国ニ感觸スルヤ、国内^{うち}乍^{たち}チ破裂シ、党論ヲ沸起シ、維納、及ヒ「ベスチュ」兩都、首^{はじ}ニ騒乱ヲ起シ、先帝「フェルゼナン」第四世、立憲政治ヲ約シタルモ、固^こリ貴族輩ノ志ニアラサレハ、履行スル能ハス、竟^{つひ}ニ今帝ニ位ヲ禪^{せん}レリ、是ヨリ帝室貴族ハ、專治ニ復センヲ欲シ、工商士民ハ、自由ヲ伸ンヲ欲シ、匈加利ハ別ニ自立ヲ謀リ、僧侶ハ老權ヲ振ヒ、国情四分五裂シ、国歩ノ蹇^{けん}艱^{かん}ハ、年ヲ積ミテ平カナラス、……

「封建ノ夢ヲツムケ」ていた貴族は当時約二五万人。W・M・ジョンストンの『ウィーン精神』によれば、貴

族階級は上級、下級に大別され、更に細く序列化されていた。

……貴族社会のトップ・グループである上級貴族 (Hochadel) ないし Aristokratie) と、セカンド・グループである下級貴族 (叙爵による非領主的貴族 Briefadel ないしは Dienstadel) である。また同じ上級貴族でも、一八〇六年の神聖ローマ帝国消滅以前から領邦君主として統治していた血筋と、それ以外の血筋では差があった。上級貴族は大公 (Erzherzog) を名乗る皇族か、侯爵 (Fürst) ないし伯爵 (Graf) の称号を持つ人々である。下級貴族は帝冠に対する勲功で新規に位階を授与された人々で、序列順に言えば男爵 (Freiherr) 、士族 (Ritter) 、貴士 (Edler) 、それからたんにフォン (von) しかつかない人々に分かれていた。⁽²⁹⁾

医師のアルブレヒト・フリートリッヒ・フォン・ローレツ (Albrecht Friedrich von Roretz) と、アウグステ・フィツェンティア・テレジア、フォン・シェッフアールゲルンスハイム (Auguste Vicentia Theresia von Schöffler-Gernsheim) とは、革命勃発の二年前、一八四六年の三月結婚し、その年の十二月十九日⁽³⁰⁾、長子を設けた。この長子がローレツである。

父アルブレヒト・フリートリッヒは一八一六年、ドレスデンに生まれ、長じて医師となったが、兵役に服し大尉 (Hauptmann) として活躍していたさ中、コレラに罹患し死亡したので、その後はブレダ伯爵 (Graf Breda, Senatspräsident) が幼少のローレツの後見を務めた⁽³¹⁾、と伝えられる。母アウグステは一八一九年生、ローレツ死後十四年経た一八九八年、七九歳で亡くなった⁽³²⁾。

前に引用した貴族の序列によれば、ローレツ家は単に何らかの勲功によって最下位の von の称号を得たに過ぎないことになるが、一方、ローレツ家はホルン市街北東八キロの地ブライテナイヒ (Breitenreich) に豪壮な館を所有していたことが、佐々木仁一、小形利彦両氏の現地調査で確認されている。

……八キロメートルばかり山手の方に城はあった。白い館といった感じである。……

入口を入ると中庭があり、これを囲んで口の字型に建物がたって居り、白い壁面には処々に色彩のある模様が描いてある。二階三階は中庭に面して廻廊をめぐらし、バロック、ロココ風の手すりそれぞれついている。

中庭から建物の中にはいると薄暗い部屋部屋で、何れも居間であり、調理室もある。調度品や家具などは貴族的でそのままになっており、各部屋に家族の写真が掲げてある。数十もある部屋は、無人のためか掃除が行き届かないようであった。二階の各部屋は家族達の団らんの場所らしく、ピアノなど楽器の置いてある広間もあり、女性のための化粧室などもあった。三階は主として居間や書齋で、……

四階は屋根裏の部屋で天井が低く、様々の道具類が置いてあった。

城の窓から外を見ると、近くのホルンの町をこえて、大陸らしい平野のあちこちになだらかな丘や森と、町や部落が転在している。⁽³³⁾

「白い館といった感じ」のブライトナイヒの館は、今日、シュテンツェルの『オーストリア 城から城へ⁽³⁴⁾』でも紹介されているが、一五四一年に築かれた由緒ある館で、十八世紀にはホヨ伯爵の所有であった。何時の頃からか、その時も経緯も不明であるが、ローレッツ家の所有に帰する所となる。ローレッツの弟エルンストの子の妻で、現在、館の管理をしているマリア (Maria von Roretz) の言によれば「ローレッツは、早くから家をあけていたこともあって弟のエルンスト・フォン・ローレッツにブライトナイヒ城を所有させました……帰国後のローレッツは、ブライトナイヒへは遊びに来る程度でした⁽³⁵⁾」由である。複数のローレッツ関係資料⁽³⁶⁾にいう「ウィーン生」のウィーンが地図上の名称と同一ならば、ローレッツはこのホルンにあるブライトナイヒの館では生まれていないことになる。ローレッツ家が館を所有したのはローレッツ誕生後であろうか。それとも別(本)宅がウィーン市内にあったのか。出

生の地は今の段階では特定しがたい。

二 ギムナジウム期

一八〇五年以来、オーストリアの小学校は六〜十二歳の六年間が就学期間であった⁽³⁷⁾。ローレッツの小学校時代についての資料は無いが、この小学校学制を念頭に置き、後述のギムナジウム進学状況から逆算すると、一八五二年の秋、満五歳と十カ月のローレッツは、一八五二／五三学年度(Schul Jahr)の冬学期から小学校第一年生となつた筈である(後述年表7参照)。

六年間の小学校課程を終えたローレッツは一八五八年十月、カルクスブルク(Kalksburg)のギムナジウムへ入学した⁽³⁸⁾。当時の鳥観図⁽³⁹⁾によればカルクスブルクは十九世紀半ばまでは、ウィーン市南西部郊外の山麓にある二〇軒足らずの小寒村に過ぎなかった。

一八五〇年代、ウィーンにあるギムナジウム名門校としては、貴族の子弟を軍人、官吏に養成することを目的としたテレジアヌム・アカデミー(Telesianum Academie)、学究能力の育成を目的としたアカデミッシェス・ギムナジウム(Academisches Gymnasium)、宗教色が濃く貴族層に幅広く支持されていたショッテン・ギムナジウム(Gymnasium zu Schotten)などが著名であった⁽⁴⁰⁾のに、何故、ウィーン市外れの田舎のギムナジウムへ進んだのであろうか。当時、ギムナジウムへ入学すれば、生徒寮に寄宿するか、然るべき家族に下宿することは特例ではなかったから、地理的に生家とギムナジウムが近いことだけが理由ではあるまい。事実、ローレッツは一八六二年の秋、カルクスブルク・ギムナジウム第四級生としての夏学期を修了すると、一八六二／六三学年度の冬学期から、ウィーンから北へ百五十キロも隔ったボヘミアの古都クレムジルのギムナジウムへ第五級生として転入した⁽⁴¹⁾の

である。このカルクスブルク、クレムジル、各々の選択は恐らく、後見人ブレダ伯爵の意見によるものであろうが、その選択の理由については、推測の手掛りすらない。ただ、医学の多くの業績がボヘミア出身者によって成されているが、その理由の一つとして、ボヘミアのカトリック啓蒙主義による教育を挙げる観方もあることを指摘しておく。クレムジル〔Krems(e)r、現在は Kroměříž〕は、一八四八年の三月革命が圧殺された後、立憲君主制の確立を目指して召集された憲法制定国民議会が落ちのび、自由主義的、連邦主義的憲法草案を作成した地として歴史に名を残している。

周知のように、当時のギムナジウムにおける教科は、次第に自然科学諸教科が漸増したものの、依然としてラテン語、ギリシア語、国語が主体で、徹底して論理的思考力、修辭能力の育成と、古典に関する知識の充実が計られていた。

……ギムナージウムの生徒たちは、帝国時代あるいはその後までも、ギリシア・ラテンの詩文を暗記しなければならなかった。これは、ギリシアやローマの古典や神話に関する広範な知識を植えた。精神分析学のジークムント・フロイトに社会学者オトマール・シュパン、あるいは美術史家のアロイス・リーグルに批評家カール・クラウスといった、まるで毛色も専門も異なる人々が等しく古典や神話の豊かな知識をもっていたのは、このためである。⁽⁴³⁾……

ハープスブルク帝国の文化は、古典語教育の土台の上に築かれたものである。……ハープスブルク帝国の文化を築いた人々は、ギムナージウムでラテン語を八年、ギリシア語を五、六年学び、ドイツ語に翻訳する訓練を通して、種々の概念を自由に操る能力を身につけた。⁽⁴⁴⁾

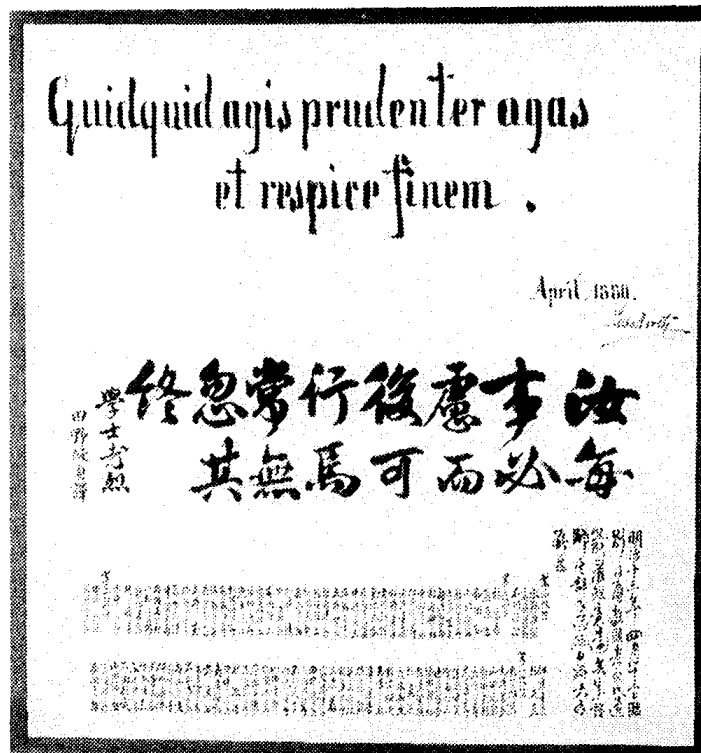
クレムジルのギムナジウムでも、表1にみられるように、語学教科は実に教科全体の六〇％に近い。⁽⁴⁵⁾

表 1

週合計時間	学科								学年次		
	数学入門	科学	数学	地理歴史	地理	ボヘミア語	(国語) ドイツ語	ギリシア語		ラテン語	宗教
24		2	3		3	2	4		8	2*	1
25		2	3	4		2	4		8	2	2
26		2	3	3		2	3	5	6	2	3
27		3	3	4		2	3	4	6	2	4
27		2	4	4		2	2	5	6	2	5
26		2	3	3		2	3	5	6	2	6
28	2	3	3	3		2	3	4	6	2	7
28	2	3	2	3		2	3	5	6	2	8

* 15時/週

図VI



本医学部の附属図書館医学部分館には、極彩色の日本画でローレッツ指揮する所の手術図⁽⁴⁶⁾が遺されているが、今一幅、明治十三年四月十三日、ローレッツが任期を満了し、その別宴の席に臨んで公立医学校生徒に与えたラテン語箴言の大幅の掛軸⁽⁴⁷⁾(図VII)が伝承されている。曰く、

‘Quidquid agis prudenter agas et respice finem.’⁽⁴⁸⁾

当時の公立医学校教諭兼訳官田野俊貞の漢訳には「汝每事必慮而後可行焉常無忽其終」とあるが、この箴言の出典は『ローマ人行状記』⁽⁴⁹⁾第百三話である。

とある日、皇帝ドミティアヌスは宮廷を訪ねた商人から銀貨四枚で三つの箴言を購った。

○何事をするにせよ、その「結末」に思いを致してから事を起こせ

○本通りを離れず、協道にそれるな

○老夫若妻の家に宿るな

何やら深淵な箴言めく一、二番目の箴言も、三番目の箴言も、同様に極く生々しい寓話三題として語られる。

皇帝は特に最初の箴言がお気に入り、皇帝の歩を運ぶ全ての場所にその箴言を刻印するよう命じ、果ては、テール・クロスにまで刺繍させる有様であった。……後年、皇帝を倒そうとする陰謀家達は一枚の金子を投じて皇帝付きの床屋を買収し、皇帝の顔を当たるのに乗じてその喉口を搔っ切らせようとした。しかし床屋は、皇帝の喉に剃刀を当てようとしたその切那、皇帝の胸元の掛布に記された「何事をするにせよ、その結末云々」のラテン七語を眼にし、文末の語‘finem’に、一瞬、己が処刑の姿を想い浮かべた。殺意は萎え、剃刀は床に音を立てて

落ちる。……皇帝、第一の難関を免れた寓話である。

ローレツが名古屋の地で、別離の際や、「断讼醫學」講義中にラテン語箴言を引用したのは、決して浅薄な術学趣味によるものではなく、むしろ、共通の教養を持たない異文化の民の中にあつては、ラテン語箴言・格言の引用をはばかることの方が多く、最少限の発露ではなかったかと推測される。

次頁にクレムヅル・ギムナジウムの教科内容全体を第八級生を例として挙げておく(表2)。

又、前掲表に見られる各教科の他、五級生以上(上級)は与えられたテーマに就いて論文を提出しなければならぬ。同じく第八級生の独文テーマは表3のようであった。

更に、卒業年次ともなれば、マトウーラ(Matura ドイツではアビトゥーア Abitur)——卒業試験が生徒を待ち構えている。マトウーラが卒業試験であるのと同時に、大学の入学資格認定試験であったことは周知のとおりである。一旦合格すればオーストリアのみならず、ドイツの大学へも入学が許可される⁽⁵³⁾となれば、生徒にとっては、人生の岐路にたちはだかる最初の関門ともなる。マトウーラは筆記試験が第一次試験であり、口述試験が第二次試験であった。

フロイト(Sigmund Freud)が『夢の解釈』の中で、或る範疇の夢を「マトウーラの夢」の名のもとに一括し、その精神分析を試みたことは良く知られた所である。フロイト自身はウィーンのシュペル・ギムナジウムを首席で通した。そのフロイトですら、マトウーラ第一次試験の筆記試験を終えただけで、その解放感、脱力感、不安交々の感想⁽⁵⁴⁾を友人に次のように洩らしている。マトウーラの生徒に与える心理的圧迫感の一端をうかがうことができよう。

VIII. CLASSE

- Religion** 2 St. — Die Geschichte der Kirche Christi, nach : Dr. Fessler.
- Lateinische Sprache.** 6 St. — Tacitus Hist. II. nach : Halm.
 Horat. Carmina. Auswahl und C. Sec.
 Eopd: 2. 7. 9. 13.
 Sat. I. 1, 4, 10. II. 6.
 Epist. I. 1, 2. De arte poët. (Leipzig Textausgabe).
 Geregelte Privatlektüre.
 Wöchentlich 1 Stunde stil. Übungen, nach : Süpfle, III. Teil. In jedem Semester 8 Schul- und 2 Hausarbeiten.
 Grammatik : Schulz.
- Griechische Sprache.** 5 St. — Platon's Apologie des Socrates und dessen Kriton, ex. rec. C. F. Hermani, Lipsiæ
 Sophoclis Oedipus Coloneus, nach : Dindorf, und nach Möglichkeit Hom. Odys. Lib. 18 und 20.
 Geregelte Privatlektüre.
 Monatlich eine schriftliche Schulaufgabe.
 Grammatik : Curtius, im 1. Semester wöchentlich, im II. Semester alle 14 Tage 1 Stunde.
- Deutsche Sprache.** 3 St. — Entwicklung der ästhetischen Grundbegriffe unter Bezugnahme auf die einzelnen Dichtungsarten. Literaturgeschichte der neuesten Zeit nebst übersichtlicher Wiederholung der übrigen Literaturperioden.
 Lektüre aus Mozart, III. Teil, f. Obg.
 Redeübungen und Vortrag mustergiltiger Gedichte.
 Alle 4 Wochen eine schriftliche Arbeit.
- Böhmische Sprache.** 2 St. — Schluss der Literaturgeschichte der neueren Zeit Parallel gehalten zur Lektüre, diese aus Jireček Anthologie z literatury české doby nové.
 Übersichtliche Wiederholung der gesammten böhm. Literaturgeschichte.
 Redeübungen und Vortrag Neuböhm. Gedichte.
 Alle 4 Wochen eine schriftliche Arbeit.
- Geographie, Geschichte.** 3 St. — I. Semester : Geschichte der österr.-ungar. Monarchie, nach : Tomek.
 II. Semester : Statistik, nach : Schmidt. Vaterlandskunde, nach : Hannak.
- Mathematik.** 2. St. — Wiederholung der gesammten Algebra und Geometrie in Verbindung mit Übungsbeispielen, nach : Močnik's Lehrbuche.
- Philosophische Propädeutik.** 2 St. — Empirische Psychologie, nach : Lindner.
- Naturwissenschaftlichen.** 3 St. — Magnetismus. — Elektricität. — Licht. — Strahlende Wärme. — Astronomie. Nach : Dr. Schabus, f. Obg.

ヴィーン

一八七三年六月十六日、夜

親愛なる友よ

滑稽なこのわれらの世紀において一番つまらない洒落を敢えて書くなら、次のように言えるかも知れませんが、
ん。^マトゥーラは死んだ。マトゥーラ万歳V。でも、この洒落はあまりぼくの気に入りません。むしろ二番目のマトゥーラの方も済んでくれていたらなあ、と思うくらいです。筆記試験の後一週間というもの、ぼくはひそかな悔恨と不安のうちに時間を浪費してしまい、ようやく昨日から失われた時間をつぐない、これまでのたくさんの穴を埋めようとし始めているところです。……五つの答案についての成績は、優、良、良、良、可でした。全く、癪にさわれます。ラテン語では、たまたまぼくがずっと以前に自分で読んだことのあるヴェルギリウスの作品からある箇所を出されたために、うかうかと定められた時間の半分で急いで書き上げてしまい、見事に優を棒にふってしまったという羽目になりました。それで他の男がラテン語で優をとり、ぼくの方は二番目で良。独

表 3

1. Die Culturentwicklung der Menschheit, nach dem „Eleusischen Feste“ von Schiller.
2. Welche Ursachen führten den Sturz des merowingischen Reiches durch Pipin den Grossen herbei?
3. Frisch in den Ozean schiff mit tausend Masten der Jüngling, Still auf gerettetem Bot kehrt in den Hafen der Greis.
Schiller.
4. Volks- und Kunstpoësie.
5. Wol dem, der wie aus Arbeit sich zur Musse.
Aus Musse sich zur Arbeit sehnt. Felix Dahn an Scheffel.
6. Durch welche Motive ist die Charakterwandlung Kriemhildens im Nibelungenliede gerechtfertigt?
7. Der Strom ein Bild des menschlichen Lebens. nach Mahomets Gesang von Göthe.
8. Wer im Besitz ist, lerne verlieren;
Wer im Glück ist, lerne den Schmerz!
Schiller „Braut von Messina.”
9. Wodurch gelangt ein Volk zu weltgeschichtlicher Bedeutung?
10. Nil sine magno
Vita labore dedit mortalibus. Hor., sat. I. 9. 59.

文羅訳は一見とても簡単そうで、その簡単さのうちに難しさがひそんでいました。ぼくらは時間の三分の一しかそれに当てなかつたので、とんでもない大失敗をやらかし、結果は可。他の二つはどうにか良。ギリシア語は、エディプス王から三十三句の長い箇所が出され、うまくいってぼくだけが良。この箇所も同じく前に自分で読んであり、分からない点はひとつもないようにしてあつたのです。ぼくらががたがた震えながら臨んだ数学の試験はともうまくいって、良と書いておいたのは、まだ正確な点数が分かっていないからなんです。最後に、ぼくのドイツ語の作文は優のスタンプをもらいました……

ローレツはこのマトウーラを一八六六年六月九日、通過した。その卒業試験成績証明書⁽⁵⁶⁾(大学入学資格認定書)は次頁のとおりである(表4)。

前掲フロイト書簡(生松敬三他訳)の中の「優」「良」「可」の原語は、上から順に、'ausgezeichnet' 'lobenswert' 'befriedigend'⁽⁵⁶⁾である。又、次表(表5)はシュニッツラー(Arthur Schnitzler)のアカデミッシェス・ギムナジウム卒業試験での成績証明書⁽⁵⁷⁾(一八七九年)下欄に見られる評価用語の順位表である。

表 5

Sittl. Betragen :	musterhaft	lobenswert	entsprechend	mind. entsprech.	nicht entsprech.	—	—
Fleiss :	ausdauernd	befriedigend	hinreichend	ungeleichmässig	gering	—	—
Fortgang	ausgezeichnet	vorzüglich	lobenswert	befriedigend	genügend	nicht genügend	ganz ungenügend.

この学業欄を優良可方式で置き換えれば、「秀、優、良上、良、可、不可、落第」の七段評価となるろうか。
ギムナジウムの卒業年は、ローレツが一八六六年、フロイトが一八七三年、シュニッツラーが一八七九年と、

v. Roretz Albrecht

... Wien *in* Nied-Oesterr. *am* 19. Dec. 1846 *geboren*,
hat die Gymnasial-Studien vom Jahre 1859 bis 1862 zu Kalksburg
 [in] Nieves Oesterreich, vom Jahre 1863 bis 1866 am k. k. Gym-
 [nasium] zu Kremsier absolviert und

*sich der Maturitäts-Prüfung vor der unterzeichneten
 Prüfungs-Commission unterworfen.*

*Auf Grund derselben wird ihm nachstehendes Zeugnis
 ausgestellt :*

Sittliches Betragen : tadellos.

Leistungen in den einzelnen Prüfungs-Gegenständen :

Religionslehre : genügend.

Lateinische Sprache : schriftlich : Uebertragung ins Latein : be-
 friedigend ; aus demselben : recht be-
 friedigend ;
 mündlich : befriedigend.

Griechische Sprache : schriftlich Uebertragung aus Herodot be-
 friedigend,
 [mündlich :] aus Homer genügend.

Deutsche Sprache : der schriftliche Aufsatz sehr gut, die [münd]
 Prüfung erlassen.

Böhmische Sprache : dispens. dto 20. März 1863 [] 6610

Geschichte und Geographie : befriedigend.

Mathematik : *schriftlich und mündlich :* befriedigend.

Physik : auf Grund recht befriedigender Semestral-Leistungen
 die Prüfung erlassen.

Naturgeschichte : Ergebnis der Semestral-Leistungen recht be-
 friedigend.

Philosophische Propädeutik : Ergebnis der Semestral-Leistungen im
 Ganzen befriedigend.

Freie Lehrgegenstände : ∅

*Da hiernach der Examinand den gesetzlichen Forderungen
 entsprochen hat, so erhält er hiermit das Zeugnis der Reife.*

Kremsier den 9. Juni 1866

A. Wilhelm

E. E. Schland

[] は推定, 及び判読不能を示す)

表 6

宗教	可
ラテン語 作文 解釈 口述	良 優良
ギリシア語 ヘロドトス訳 ホメロス訳(口述)	良 可
ドイツ語 作文 口述	優 免除
歴史・地理	良
数学 筆記・口述	良
物理学	学期間成績 優秀ヨッテ 試験免除
博物誌	学期間 優
哲学入門	優
自由選択	無

各々一〇年前後の隔たりがあり、地理的にもクレムジルは、ウィーンに較べればボヘミアの片田舎に過ぎない。一八六〇年代のクレムジル・ギムナジウムにおける教育状況は、当然、末端の評価用語を含めて、一八七〇年代ウィーンのそれとは相対的に未整備、未成熟な段階にあったと思われる。ローレッツの成績証明書の評価用語としては、*tadellos, genügend, befriedigend, sehr gut, recht befriedigend, ganz befriedigend* が用いられている。これらの用語がボヘミアのギムナジウムで用いられた評価用語の全てであるのか、又、その順位は、等々については未調査であるが、フロイト、及びシュニッツラーの成績評価における用例を強いて援用すれば、*genügend* = 可、*befriedigend* = 良、*recht (ganz) befriedigend, sehr gut* = 優 (*recht, ganz, sehr* 三者の区分は不明) と言った所であろうか。試みにこの優良可順位でローレッツの成績を表現してみよう(表6)。

表7

西 暦	年 齢	学 年	学 校	事 項
1846	0			12月19日誕生
1847	1			
1848	2			
1849	3			
1850	4			
1851	5			
1852	6			10月頃小学校入学
1853	7	1	小 学 校	
1854	8	2		
1855	9	3		
1856	10	4		
1857	11	5		
1858	12	6		
1858	12	I	ギ ム ナ ジ ウ ム	9月頃小学校終了 10月頃カルクスブルク・ギムナジウム入学
1859	13	II		
1860	14	III		
1861	15	IV		
1862	16	V		10月頃クレムジル・ギムナジウム編入
1863	17	VI		
1864	18	VII		
1865	19	VIII		
1866	20			6月9日マトゥーラ（卒業）試験合格認定

前掲フロイト書簡中のギリシア語の例からもうかがわれるように、学年一位が「優」ではなく「良」の場合もあり、当時ギムナジウムの評価方法が絶対評価であったことが判明する。又、「優、良、良、良、可」のフロイトが首席であったことから、「全優」、「全甲」即「秀才」という図式は、単に日本的なイメージに過ぎないことにも気付かされよう。

ローレッツのクラス内での相対的評価は不明であるが、この成績証明書からは、少なくとも、物理や博物が大の得意で、ラテン語と国語に強く、抽象的思考力にも秀れた、操行も「申し分のない」、ローレッツ少年時代の資質の儼然な輪郭だけは読みとることができよう。この成績証明書に基づきギムナジウム卒業までの年表(表7)を前頁に掲げた。

三 大学期

ローレッツがどのような理由で医学を志したのか、を物語る明確な資料はない。しかし、父が医師であり、弟エ
ルンスト(Ernst)も又、ウィーン大学法学部出身の官吏であったが、ニイダー・エステルライヒ低 奥 州の医事行政に手腕を振るった。⁵⁸⁾
ローレッツにとって医師とは「世襲の家業」程の認識であったのかも知れない。ローレッツに医学への志向があった
とすれば、当時、世界の最高水準にあり地の利にも恵まれたウィーン大学へ進学したのは、極く自然な成行きで
あろう。

ローレッツは一八六六年秋十月、ウィーン大学医学部へ進んだ。ウィーン大学に保管されている名簿によれば、
ローレッツは一八六六／六七学年度の冬学期を第一学期として、一八七一学期の夏学期までの一〇学期(五学年)の

間、正規生 (Ordentliche Hörer) として登録されている。⁵⁹⁾

さて、「……奥国ノ武事ハ、長スル所ニ非サレトモ、其文学ハ、欧洲中ニ於テ、実ニ盛ヲ極メタリ、政治、法律、理化、器械、ノ諸術ヲ講シ、医学ノ如キハ、殆ト其比ヲミズ……」⁶⁰⁾と極東日本にまで喧伝されたオーストリアの医学とは、とりもなおさず、ウィーン大学医学部のそれであろう。

一三六五年創立の中欧最古の大学ウィーン大学は、一八四八年三月革命の拠点となっただけに、革命鎮圧後は特に軍部から白眼視され、学舎の一部は兵営として占拠され、大講堂は科学アカデミーにその場を譲らされた。医学部の講義も本来の大学内や附属病院である帝・王立総合病院以外に、ヨーゼフィヌムなどのギムナジウムや、市内に散在する各種病院を使用せざるを得ず、ローレッツの学生時代は施設面では決して恵まれた環境ではなかった。

一方、ウィーン市街では一八五〇年代の終わりから、旧都心を囲む空掘と緑地帯を転用して環状道路が造成され、その道路に面して、ゴシック、ルネッサンス、新古典等様々の様式の豪華建築物を羅列する大規模の都市改造計画が進行しつつあった。国会議事堂、市庁舎と共に、ウィーン大学が建築の裁可を得たのは一八七〇年であり、建築の完成したのは一八八四年であった。⁶¹⁾（ローレッツが正規生の課程を了えて、外科学位の取得に備え始めた頃、工事は着工され、新大学が完成したのは、ローレッツが日本を引き払い、帰郷してロシア皇女と華燭の典を挙げた年である。）

しかし、大学にとって建物は重要な要素の一つには相違ないが、最大の要素は言うまでもなく、人——研究・教育陣容である。ウィーン大学は毎年『帝・王立ウィーン大学便覧』を刊行してきたが、その内容は教授、助教、助手、私講師のディレクトリーである。ローレッツにとっては第二、三学期に当る一八六七年版便覧に紹介さ

れている教授を摘録してみよう(表8)。

同六七年版にはその名は見られないが、同年中にはビルロートもチューリッヒ大学から招かれ、外科の教授に就任する。川喜田愛郎『近代医学の史的基盤』(以下『史的基盤』と略記)には、表示した前掲教授一九名中、実に半数近い八名——ビルロートを加えれば九名、シュロッフ、ヒルトン、ロキタンスキー、スコダ、ブリュッケ、オッポルツァ、アアルト、ヘブラ、ビルロートが、私講師の中からは六名——ツイルク、ディッテル、ヘラー、ポリッツァ、シュトリッカー、マイネルトの、計一五名もが登場する。登場するというより、近代医学史開幕の一期を画する人々によって、当時のウィーン大学医学部の教育・研究陣容は構成されていた、と言うべきであろうか。このロキタンスキー、スコダ、ヘブラ、更にはビルロートなど、近代医学史上の巨人を擁した十九世紀中葉から後半にかけてのウィーン大学の学風は、今日、新ウィーン学派(Die zweite

表 8

Karl Damian Schroff	(一般病理学、生薬学、薬理学)
Joseph Hyrtl	(記述・局所・比較解剖学)
Karl Rokitsansky	(病理解剖学)
Joseph Škoda	(内科臨床、診断学)
Ernst Brücke	(生理学、上級解剖学)
Johann Freiherr Dumreicher v. Oesterreicher.	(外科臨床、診断学)
Johann Oppolzer	(病理学各論、治療学、内科診断学)
Franz Kurzak	(理論的内科学)
Ferdinand Arlt	(眼科学、眼科診断学)
Karl Rudolf Braun	(医学部長)
Joseph Späth	(助産学理論と実際)
Christian August Voigt	(解剖学)
Theodor Helm	(内科臨床、診断学)
Franz Romeo Seligmann	(医学史)
Karl von Sigmund	(梅毒臨床)
Ferdinand Hebra	(皮膚病臨床)
Karl Wedl	(組織学)
Eduard Jaeger Ritter von Jaxtthal	(眼科学)
Karl Stellwag von Carion	(眼科学) (以上教授のみ)

Wiener medizinische Schule)⁽²⁸⁾として周知される所である。

新ウィーン学派について論ずることは到底その任に耐え得る所ではないが、ローレッツの医師としての人間形成に重大な役割を果たしたウィーン大学、ウィーン学派に觸れることなく、稿を進められない。『史的基盤』を数写しながら、その最少限の要約を試みた(以下43P14行目まで)。

〔新ウィーン学派〕

一八三〇年代、医事総裁補佐テュルクハイム(Ludwig Freiherr von Türkheim 1777-1846)はウィーン大学医学部の改革案を練り上げるが、陽の目を見たのは彼の死後二年目で、三月革命の影響もあり、「教える自由、学ぶ自由」をも盛り込んだ医学部改革が実現した。その改革が成功をもたらした要因はひとえに、テュルクハイムの医学発展に対する見識——医学部各講座、及び帝・王立総合病院各診療科における専門別分化の推進と、人に対する洞察力——有能な人材の発掘によるものであろう。テュルクハイムによって築かれた場と、その場に配された人々の活動によって、十九世紀後半のウィーン大学医学部は後世に言う「新ウィーン学派」学園と化した。

その新ウィーン学派を代表する人材は、第一にロキタンスキー(Karl von Rokitansky 1804-1878)であろう。一八四四年、ウィーン大学において正教科となった病理解剖学の初代教授に就任して以来、度々医学部長を努めたほか、自主的に選ばれた初めてのウィーン大学長でもあって、新ウィーン学派の文字通りの牽引車であった。同時に、「肉眼の時代のもっとも高みに達した病理解剖学者」として

……伝統的な病徴論(semiotik)に代えて病理学に基づく近代的な診断学の基礎づくりに専念する。それは彼の大著「病理解剖学ハ

ンドブーフ」(Handbuch der pathologischen Anatomie, 3 Bde., 一八四二―四六年)に結晶している。……⁽⁶⁵⁾

ロキタンスキーと共に新ウィーン学派の基礎を固めたのは、スコダ (Joseph Skoda 1805―1881) であった。一八三三年、帝・王立総合病院の無給副手から身を興し、独力で打診、聴診技術の開発に没頭した。

……その成果は一八三九年名著「打診・聴診論」(Abhandlung über Perkussion und Auscultation)となって世に現れた。……スコダは音の性質をたしかめることによって、臓器のいわば物理学的な状況、すなわち、中に含まれる空気の量、分布、張力、等を、それとして推定しようとする。それは、今日言うところの理学的(あるいは、身体的)診断法(physikalische Diagnostik)の自覚的な採用であった。……⁽⁶⁶⁾

ヘブラ (Ferdinand Hebra 1816―1880) は

……一八六九年には新しく開かれた皮膚科学教室の主任教授となった。疥癬の研究からはじまったヘブラの皮膚科学における功績を一口で言えは、諸種の皮膚病が、伝統的に液体病理学ないしはクラシス説に立って中からの「発疹」とみられていたのに異を樹てて、それらを独立の器官^{オルガン}としての皮膚の疾患とみた新しい観点にあった。……⁽⁶⁷⁾

ビルロート (Theodor Billroth 1829―1894) の

……病理学者としてのその実力は当時のウィルヒョウと競うものでさえあったと言われる。六〇年、チェーリッヒの外科教授となったが、その在任中に力作「一般外科病理学および治療法」(Die allgemeine chirurgische Pathologie und Therapie, 一八六三年)が生まれる。……

一八六七年彼は招かれてヴィーンの外科教授に就任する。……ビルロートの大外科時代 (groschirurgische Phase) と言われるさまざまな活動は、七〇年代にはじまった。六例の卵巣切除術を序曲として、食道切除 (一八七一年) ……喉頭摘出 (一八七三年)、胃切除 (一八八三年) 等、大手術の試みがあい次ぐ。もっとも有名なのは、一八八一年一月二十九日に行われた幽門癌患者の胃切除術の成功……である。それは綿密に進められたさまざまな実験生理学的、解剖学的検討……とイヌによる手術実験の後に実施されたもので、術後の長い持続効果をもったその手術の成功は近代外科学の大きな凱歌であった。……⁽⁶⁸⁾

(解剖技法を完成させたヒルトル、産褥熱の感染経路を突きとめたゼンメルヴァイス、治療面で功績のあったオボルツァー、泌尿器学の基礎を築いたディッテル、近視の原因を見出したアアルト、標準視力検査表を作ったイエーガー、等々、⁽⁶⁹⁾近代医学各分野の祖的人材が輩出しているが、これ以上の個人単位での紹介は紙面の都合上割愛せざるを得ない。――筆者)

新ウィーン学派の学風とは、いささか乱暴に一括すれば、豊富な病理解剖に裏付けられた実証的研究を主体とするという点では、確かに「パリ学派」を継承していると言えるが「パリ学派」とは時代を画する特徴として、十九世紀中葉に入って急速に進展した自然科学の成果と、その実験的手法を医学に直結させた実証的研究であり、又、その手法によって観念論的なロマン派医学を超えようとした「近代」の名にふさわしい科学的姿勢に象徴されると言えよう。

しかし、「病氣」を対象として冷静厳密に、客観的に探究しようとする医師の姿勢、態度は、特に診療の場にあつては、「診療のための医学」が時として「医学のための診療」に逆転する、或いは逆転したかのような誤解を招きやすい。

まして、細菌発見前夜の時代とあつては、仮え「病氣」を的確に把握し得たとしても、多剤療法、瀉血、果て

はヒル吸血などのいかがわしい療法を施すよりは、自然治癒に待つ「待期療法」がより良心的な対応である状況が多かったのかも知れない。華々しい成果を挙げ続けた新ウィーン学派の客観的、実証的な科学性は、一方で、その自ら培つて来た知的誠実性とボヘミア改革派カトリシズムとを一体化させて、「治療ニヒリズム」(The-rapeutische Nihilismus)、「治療懐疑主義」(Therapeutische Skeptizismus)なる言葉を生ぜしめ、又、数々の伝説をも今日に伝えている。中でも、スコルダが綿密な診断後、学生に治療法を問われ、「そんなことはどうでもよい(Das ist einerlei)」と答えた話(9)が有名であるが、この治療ニヒリズムを世紀末の物憂げなウィーン文化が醸すニヒリズムと直結させる観方(10)すら存在する程である。

「新ウィーン学派」なる言葉をウィーン大学医学部の表の象徴とするなら、「治療ニヒリズム」なる言葉はその裏の象徴であろう。二つの象徴は十九世紀後半、ウィーン、という時・空に限定された「医学」の盾の両面なのであろうか。ともあれ、ローレッツがウィーン大学医学部に在籍した時は、将にこの時代にはかならなかった。

〔講義〕

ローレッツが正規生として在籍した一八六六年(一八六六/六七学年)冬学期から一八七一年夏学期の間、ウィーン大学医学部では誰によってどのような講義が行われたかは、学年毎に学年開始直前に発行される『ウィーン大学開講講義一覽』(Öffentliche Vorlesungen an der k. k. Universität zu Wien)の該当期間に亙る全ての巻を繙けば、その全容を知り得る筈であるが、現在、ウィーン大学医学史研究所にもそのバック・ナンバーは完備していない(12)と言う。ここに一例として、ローレッツにとって正規生としては第十学期(最終学期)に当たる一八七一年夏学期の講義一覽(表9)と、それに基づいた一週間の時間割表(表10)但し、人名、講義題目は簡略化した)を次に掲げる。

表9 ウィーン大学医学部 1871 夏学期 講義題目一覧表

教授：講義題目	回/週	時間	講義室	謝礼等
I. Anatomie 解剖学				
Joseph Hyrtl: Anatomie der Sinnesorgane, des Gehirnes und des Nervensystems. 感覚器管、脳、神経系解剖学	5	午後 2~3	解剖学講義室	c. 3fl. 50kr. c.: collegiengeld (以下、全て 週5回は 月、火、水、 木、金。)
—: Topographische Anatomie des Beckens und der Extremitäten. 局処(骨盤、四肢)解剖学	3時間 /週	土日 午前 8:30 ~ 9:00	同 上	
* Anton Friedlowsky: Anatomie des Gefäßsystems. 脈管系解剖学	5	午後 2~3	同 上	H. 1fl. 75kr. H.: Honorar 但しヒルトルの講義が完結した後 H. 3fl.
—: Correpetitorium aus der Sinnen- und Nervenlehre des Menschen. 人体感覚および脳神経学予講	2	水土 午後 3~4:30	同 上	
Christian August Voigt: Descriptive Anatomie. 記述解剖学	3	月火水 12~1	同 上	
—: Entwicklungsgeschichte des Menschen. 人類胎生学	2	木金 12~1	同 上	
Karl Langer: Anatomie der Sinnesorgane, der Nerven- und Gefäßsystemes. 感覚、神経、脈管系解剖学	5	12~1	ヨーゼフィヌム7番 講義室	
—: Anatomie der äusseren Formen des menschlichen Körpers. 人体外形解剖学	1	土 午前 9~10	同 上	無料
Carl Wedle: Praktische Histologie. 実地組織学	5	9~3	生理学研究所組織学 研究室	M. H. 医師 10fl. 学位受験生 5fl. M. H.: Monatliche Honorar
—: Über Einrichtung und Gebrauch des Mikroskops mit Demonstrationen. 顕微鏡の構造と使用法(標本供覧共)	3	月水金 午後 3~4	同 上	

教授：講義題目	回/週	時間	講義室	謝礼等
Carl Rokitsansky: Specielle pathologische Anatomie. 病理解剖学各論	5	午前 11~12	帝、王立総合病院及 新遺体安置所病理解剖学講義室	
——: Praktische pathologisch-anatomische Übungen. 病理解剖学実習	3	月水金 午後 3~4	同上	
* Julius Klob: Pathologische Anatomie und Histologie der Respirations- und Circulationsorgane. 病理解剖学と呼吸器・循環器組織学	2	水土 午後 1~2	同上	
* Carl von Patruban: Entwicklungsgeschichte des Menschen. 人体胎生学	2	曜日指定 なし 11:30 ~1	新遺体安置所臨床講義解剖室	H. 10fl.
——: Chirurgische Anatomie. 外科解剖学	4	火木 午後 6~7:30 土日午前 10~11:30	同上	H. 12fl. ö. W.
II. Physiologie 生理学				
Ernst Brücke: Physiologie und höhere Anatomie. 生理学と上級解剖学	5	11~12	生理学講義室	
——: Über Stimme und Sprache. 音声と言語	1	木 午後 2~3	同上	無料
Mathias Schwanda: Medicinische Physik. 医物理学	3	火水木 12~ 1:30	小薬理学講義室	H. 6fl.
Emanuel August Michael: Medicinische Physik. 医物理学	4	月火木金 11~12	同上	
Samuel Schenk: Über Zeugung und Entwicklung des Menschen und der Wirbelthiere. 人類と脊椎動物の生殖と胎生	2	土日 9~10	同上	
——: Curs über Physiologie des Menschen. 人体生理学コース	4	曜日指定 なし 午後 4~5	同上	H. 6fl.
* Emanuel Klein: Histologie. 組織学	3	火木土 午後 4~5	病理解剖学講義室	

教授：講義題目	回/週	時間	講義室	謝礼等
—：Praktische Übungen im Institute für experimentelle Pathologie. 実習	5	曜日、時間指定なし	実験病理学研究所	M. H. 10fl.
* Carl Toldt：Allgemeine Gewerbelehre und ihre Beziehungen zur Physiologie mit mikroskopischen Demonstrationen. 一般組織学及び関連生理学(顕微鏡標本供覧)	3	火木金 午後 3~4	ランガー教授講義室	H. 5fl
III. Allgemeine Pathologie, Therapie, Toxicologie 一般病理学・治療法・毒物学				
Carl Ritter von Schroff：Allgemeine Pathologie. 一般病理学	5	午前 10~11	大薬理学講義室	
—：Toxicologie. 毒物学	3	月水金 午前 9~10	同上	
—：Pharmakognostische Demonstrationen. 生薬学供覧		水 午後 3~4	小薬理学講義室	無料
—：Apotheker-Medicinalverordnungen. 薬剤士一医学法規		水 午後 2~3	同上	
Salomon Stricker：Allgemeine und experimentelle Pathologie. 一般及び実験病理学	2時間/週	土 11~1	病理解剖学講義室	
* Benedikt Schulz：Elektrotherapie. 電気療法	5	9~10	市内プランケンガッセ Nr.7	6週間コース H. 10fl
Moriz Benedikt：Elektrotherapie. 電気療法	5	10~11	内科学講義室	4週間コース
—：Elektrotherapie. 電気療法	1	土 12：30~2	同上	学生向
* Friedrich Fieber：Chronische Nervenkrankheiten und Elektrotherapie. 慢性神経病と電気療法	5	11~12	帝・王立総合病院 電気療法並びに吸入病棟	6週間コース H. 12fl.
—：Chronische Nervenkrankheiten und Elektrotherapie. 慢性神経病と電気療法	1	1.5時間 曜日指定なし	同上	1学期コース
* Wilhelm Winternitz：Hydrotherapie. 水療法	(2)	水土 午前 8~9：30	カイザー浴場	6週間コース H. 10fl.

教授：講義題目	回/週	時間	講義室	謝礼等
——：Ueber hydriatische Behandlung fieberhafter Krankheiten. 熱病の水療法治療	1	水 午後 4~5	帝・王立総合病院 内科学講義室	
IV. Medicin 内科学				
Johann Ritter von Oppolzer: Specielle medicinische Pathologie, Therapie und Klinik. 内科病理学各論、治療と臨床	5	午前 7~9	帝・王立総合病院 内科診療室	
Adalbert Duchek: Specielle medicinsche Pathologie, Therapie und Klinik. 内科病理学各論、治療と臨床	5	午前 7~9	同 上	
* Eugen Kolisko: Percussion und Auscultation. 打診聴診	5	午前 10~11	帝・王立総合病院胸 疾患病棟	6週間コース H. 15fl.
* Anton Drasche: Theoretische und praktische Vorträge über specielle medicinische Pathologie und Therapie. 内科病理学各論、治療法についての理論的・实际的講義	5	午後 5~6	帝・王立ルドルフ病 院	6週間コース H. 10fl.
* Johann Schnitzler: Kehlkopfkrankheiten und über Auscultation und Percussion. 喉頭病と聴打診	5	午前 9~10	帝・王立総合病院 内科学講義室	4週間コース H. 15fl.
* Leopold Ritter von Schrötter: Pathologie und Therapie und Klinik der Kehlkopfkrankheiten. 病理学と治療法、並びに喉頭病臨床	3	火木土 午前 7:30 ~8:30	シュレッター診療院 喉頭鏡診療室	H. 6fl.
——：Auscultation und Percussion. 聴診打診	5	午前 10:30~ 11:30	シュタントハルツナー 博士病棟	6週間コース H. 15 fl.
——：Laryngoskopie und Rhinoskopie. 喉頭鏡検査と鼻鏡検査	5	午前 9~10	帝・王立総合病院 喉頭鏡診療室	6週間コース 20fl.
* Carl Störk: Laryngoskopie, Rhinoskopie und Erkrankungen des Kehlkopfes, der Luftröhre und des Rachens. 喉頭鏡、鼻鏡検査と喉頭、気管、咽頭疾病	5	午前 11~12	内科学講義室	6週間コース H. 15fl.
* Emil Stoffella Ritter von alta Rupe: Anleitung zur Diagnostik. 診断学手引き	3	月水木 午後 3~4	同 上	
——：Klinische Propädeutik. 臨床入門	3	月水木 午後 3~4	同 上	

教授：講義題目	回/週	時間	講義室	謝礼等
<p>* Samuel Stern: Klinische Propädeutik. 臨床入門</p> <p>a) Objective Symptomatologie. 他覚症候学</p> <p>b) Subjective Symptomatologie. 自覚症候学</p> <p>c) Therapio-Technik. 治療技術</p>	2	土日午前 11~ 12:30	同上	H. 3fl. 15kr.
	2	火木 午後2~3	同上	H. 2fl. 10 (kr?)
	2	月水 午後2~3	同上	H. 2fl. 10kr.
<p>* Moriz Rosenthal: Ueber Pathologie und Therapie des centralen und peripheren Nervensystems. 中枢・末梢神経系病理学と治療法</p>	回数・曜日指定なし	午前 11~12	帝・王立総合病院第88号室	6週間コース H. 医学部生 10fl. 学位受験生 5fl. 無料
<p>Franz Romeo Seligmann: Geschichte der Medicin und der Seuche vom Mittelalter bis auf die neueste Zeit. 医学と病気の歴史(中世-最新)</p>	5	午後 1~2	図書館講義室	
<p>* Carl B. Hofmann: Über Nierenkrankheiten und Semiotik des Harnes. 腎臓病と尿症状学 * Semiotik</p>	3	月水金 午後 2:30~ 4:30	新遺体安置所	8週間コース H. 15fl. ö. W.
<p>——: Diagnostik der Unterleibskrankheiten. 下腹部病診断学</p>	3	曜日・時間指定なし	シュタントハルツナー博士病棟	10週間コース H. 10fl. ö. W.
V. Chirurgie 外科学				
<p>Johann Freiherr von Dumreicher: Chirurgische Klinik mit Vorlesung über specielle chirurgische Pathologie und Therapie. 外科臨床(付外科病理学各論・治療法講義)</p>	5	午前 9~11	帝・王立総合病院	
<p>——: Chirurgische Operationslehre. 外科手術学</p>	2	月水 午後 5~6:30	同上	
<p>Theodor Billroth: Chirurgische Klinik mit Vorlesung über specielle chirurgische Pathologie und Therapie. 外科臨床(付外科病理学各論、治療法講義)</p>	5	午前 9~11	同上	
<p>——: Über Krankheiten der Knochen und Gelenke. 骨、関節病</p>	1	土 午前 9~11	同上	無料

教授：講義題目	回/週	時間	講義室	謝礼等
* Friedrich Salzer: Chirurgische Operationslehre. 外科手術学	2	水金 午後 5~6:30	新遺体安置所 法医学講義室	
Carl Cessner: Chirurgische Instrumenten- und Verbandlehre sammt Übungen. 外科器具・包帯学(実習共)	2	土日 午前 9~11	ビルロート教授外科学講義室	
Leopold Dittel: Specielle chirurgische Pathologie und Therapie. 外科病理学各論、治療法	5	午前 9~11	帝・王立総合病院第81、82号室	H. 10fl. 50kr.
—: Über Krankheiten der Prostata und Strikturen der Harnröhre. 前立腺病と尿道狭窄	(2)	土日 午前 9~11	同上第82号室	H. 15fl.
* Carl Böhm: Chirurgische Instrumenten- und Verbandlehre, sammt Übungen. 外科器具・包帯学(実習共)	2	火木 午後 4~6	帝・王立総合病院 ビルロート教授外科学講義室	
—: Angewandte Instrumenten- und Verbandlehre, Technik der chirurgischen Operationen und Verbände, mit Demonstrationen und Übungen. 応用外科器具・包帯学、外科手術法と包帯法 (供覧、実習共)	回数/ 週、曜日、時間指定なし		帝・王立ルドルフ病院	多週間コース H. 18 u. 12fl.
* Albert Mosevig: Chirurgische Operationslehre mit praktischen Übungen an der Leiche. 外科手術学(屍体による実習共)	6	午前 8~9	新遺体安置所 手術実習所	2ヵ月コース H. 本国人 22fl. 外国人 25fl.
* Ignaz Neudörfer: Operationslehre. 手術学	回数/ 週、曜日、時間指定なし		帝・王立総合病院 遺体安置室	8~10週間 コース H. 15fl.
* Adolph Zsigmondy: Operative Zahnheilkunde. 歯科手術学	2	土日 午後1~2	帝・王立総合病院 第一外科病棟	2ヵ月コース H. 12fl.
* Philipp Steinberger: Operative Zahnheilkunde. 歯科手術学	2	水金 午後2~3	ドウムライヒャー教授外科学講義室	H. 10fl.
* Michael Schoff: Operative Zahnchirurgie mit klinischen Demonstrationen. 手術歯科外科学(臨床供覧共)	3	曜日指定 なし 12~1	外来診療所	H. 15fl.

教授：講義題目	回/週	時間	講義室	謝礼等
* Johann Lanÿi: Über Zahnheilkunde. 齒科学	2	月木 午後 3~4:30	ドラムライヒャー教 授外科学講義室	2ヵ月コース H. 10fl. ö. W.
* Adam Politzer: Praktische Ohren- heilkunde mit Demonstrationen an pathologischen Präparaten und Übungen an Ohrenkranken. 実地耳科学(病理標本展示と耳患者実習 共)	5	12~1		5週間コース H. 15fl.
* Joseph Gruber: Theoretische und praktische Ohrenheilkunde. 理論・実地耳科学	5	午前 9~10	帝・王立総合病院 耳科診療室	6週間コース H. 10fl.
VI. Augenheilkunde 眼科学				
Ferdinand Ritter von Arlt: Theoretisch- praktischer Unterricht in der Augen- heilkunde. 眼科学の理論・実地教育	5	午前 10~12	帝・王立総合病院	
—: Repetitorium aus der Augenheil- kunde. 眼科学補習	1	土 10~12	同 上	無料
Eduard Ritter von Jaeger: Specielle Pathologie und Therapie der Augen- krankheiten und Klinik. 眼病病理学各論、治療法、臨床	毎日	午前 8~10	帝・王立総合病院第 45、46号室	H. 15fl.
—: Theoretisch-praktischer Unterri- cht in den Augenoperationen und in der Anwendung des Augenspiegels. 眼科手術と検眼鏡使用における理論・実地 教育	5	午後 3~4、 4~5	同 上	飛び5週間コー ス H. 手術コース 20fl. 検眼鏡眼鏡 コース 15fl.
Carl Stellwag von Carion: Specielle Pathologie und Therapie der Augen- krankheiten. 眼病病理学各論、治療法	8	月水金 11~1 火木 11~12	帝・王立ヨーゼフア カデミー眼科診療室	
* August Ritter von Reuss: Repetito- rium aus der gesamten Augenheilkunde. 総合眼科学補習	5	午後 4~5	眼科学講義室	2ヵ月コース 10fl.
* Biermann: Operative Augenheilkun- de mit Übungen am Cadaver. 眼科手術学(屍体実習共)		回数、時 間、曜日 指定なし	同 上	2ヵ月コース H. 20fl.
VII. Gynäkologie und Pädiatrik 産科学、 小児科学				

教授：講義題目	回/週	時間	講義室	謝礼等
Carl Braun: Gynäkologische Klinik mit theoretisch-praktischem Unterrichte in der Geburtskunde. 婦人科学臨床(産科学理論・実地教育共)	5	午後 1~3	帝・王立総合病院 婦人科学講義室	
Joseph Späth: Theoretisch-praktischer Unterricht in der Geburtshilfe für Hebammen. 助産婦のための助産法理論・実地教育	5	午前 8~9	帝・王立総合病院内 低奥州産院	無料
* Gustav Braun: Über Gynäkologie. 婦人科学	(2)	土日 11~1	帝・王立ヨーゼフ・ アカデミー 助産婦 人科診療室	2ヵ月コース H. 25fl.
* Carl Mayrhofer: Operative Geburtshilfe und Gyäkologie. 産婦人科手術学	6	夕方 6~7	新遺体安置所	H. 20fl.
* Carl Habit: Theoretische Geburtshilfe für Hebammen. 助産婦のための助産法理論	5	午前 10~11	産科学講義室	
Hermann Widerhofer: Klinische Vorträge über specielle Pathologie und Therapie der Kinderkrankheiten. 小児病の病理学各論・治療法臨床講義	5	午前 11~12	聖アンネ小児病院	
* Josef Weinlechner: Chirurgische Pädiatrik. 小児外科学	1	曜日指定 なし 11~12	同上	
* Carl Fridinger: Über Kuhpocken-Impfung. 牛痘接種	2	火金 午後 3~4	棄児養育院	6週間コース
* Leopold Max Pollitzer: Polyklinische Vorträge über Kinderkrankheiten. 小児病外来臨床講義	5	午後 1:30~3	市立外来診療院	
* Moriz Schuller: Über Krankheiten des Kinderalters mit besonderer Berücksichtigung der Säuglinge. 小児病(乳児に特に配慮して)	5	午後 1~2	内科学講義室	6週間コース H. 医師 10fl. 学生 5fl.
* Lazar Fürth: Krankheiten der Säuglinge und Neugeborenen. 乳児及び新生児病	3	午後 5~6	内科学講義室	H. 医師 10fl. 学生 5. fl
* Alois Monti: Über die physikalische Untersuchung der Brustorgane der Kinder mit besonderer Berücksichtigung der Lungenkrankheiten.	5	午後 4~5	聖アンネ小児病院	8~10週間 コース H. 10fl.

教授：講義題目	回/週	時間	講義室	謝礼等
小児胸部器官の物理的検査(特に肺疾患に配慮して)				
* Markus Funk: Systematische Vorträge über Krankheiten der weiblichen Genitalien. 女性性器疾患体系講義	(2)	土日 午後1~2	皮膚病科学講義室	
——: Gynäkologische Diagnostik. 婦人科診断学	(3)	月水金 午後 5~6	帝・王立総合病院 1、2、3、病棟	10週間コース H. 20fl.
VIII. Hautkrankheiten und Syphilis 皮膚病学、梅毒				
Ferdinand Hebra: Klinik der Hautkrankheiten. 皮膚病臨床	5	午前 7~9	帝・王立総合病院	
Carl Sigmund Ritter von Ilanor: Klinik für Syphilis. 梅毒臨床	5	午後 4~5	同 上	
——: Theoretische Vorträge über Erkenntniss und Behandlung der Syphilis im Allgemeinen. 梅毒全般の知識・治療に関する理論講義	1	土 午前8~9	同 上	無料
Hermann Zeissl: Klinische Vorlesungen über venerische und syphilitische Erkrankungen. 花柳病・梅毒臨床講義	5	午後 4~5	帝・王立総合病院 梅毒第二病棟19、57 治療室	8週間コース H. 日本人 10fl. 外国人 15fl.
* Albert Reder: Über Hautkrankheiten. 皮膚病	3	曜日指定 なし 午後 2~3	衛成病院	3ヵ月コース H. 10fl.
* Gustav Wertheim: Über Krankheiten der Haut und ihre Behandlung. 皮膚病とその治療法	2	土日 〔午後〕 3~4	帝・王立ルドルフ病院	H. 10fl.
——: Curs für Studierende. 学生コース	(2)	土日 〔午前〕 10~ 12:30	同 上	H. 5fl.
* Isidor Neumann: Über Hautkrankheiten. 皮膚病	5	午前 10~11	帝・王立総合病院 皮膚病講義室	3ヵ月コース H. 10fl.
——: Curs für Studierende. 学生コース	(2)	土日 〔午前〕 10~11	同 上	H. 5fl.

教授：講義題目	回/週	時間	講義室	謝礼等
* Heinrich Auspitz: Pathologie und Therapie der Hautkrankheiten. 皮膚病病理学・治療法	2	土日 〔午後〕 12~1	同上	H. 学生 5 fl. 医師 10fl.
—: Pathologie und Therapie der syphilitischen Krankheiten. 梅毒病理学・治療法	(3)	水土日 午前 11~12	同上	H. 学生 5fl. 医師 10fl.
* Emanuel Kohn: Pathologie und Therapie bei syphilitischen Erkrankungen. 梅毒病理学・治療法	2	土日 午前 10~ 12:30	梅毒学講義室	8週間コース H. 日本人 5fl. 外国人 10fl.
* Moritz Kohn: Curs über Syphilis nebst Differentialdiagnostik der syphilitischen und nicht syphilitischen Hautkrankheiten. 梅毒についてのコース(附:梅毒と非梅毒皮膚病との鑑別診断)	5	午後 3~4	帝・王立総合病院 皮膚病学講義室	H. 学生 5fl. 医師 10fl.
IX. Psychiatrie 精神病学				
* Theodor Meynert: Psychiatrische Klinik mit systematischen Vorlesungen über Psychiatrie und Conversation über deren forensische Anwendung. 精神病学臨床(裁判上適用される精神病学と質疑応答についての体系的講義共)	5	午後 4~6	ウィーン州立癲狂院	H. 15fl.
Ludwig Schlager: Psychiatrie. 精神病学	(2)	土日午前 10~ 11:30	小薬理学講義室	2ヵ月コース H. 5fl.
Maxmillian Leidesdorf: Psychiatrie. 精神病学	3	火木土 午後4~5	帝・王立総合病院 皮膚病学講義室	H. 3fl.
* Michael von Viszanik: Psychiatrie. 精神病学	3	曜日、時間、場所 指定なし		
* Max Maresch: Praktische Irrenheilkunde mit klinische Demonstrationen. 実地癲狂病学(臨床供覧共)	3	曜日指定 なし 12~1	低奥州立癲狂院	3ヵ月コース H. 学生 5fl. 医師 10fl.
X. Staatsarzneikunde 国家医学				
Johann Dlauhy: Medicinische Polizei. 医事行政	5	午後 12~1	病理解剖学教室	
—: Übungen in gerichtliche obductionen. 司法解剖実習	3時間 /週 (2)	火木 午後 2:30~4	同上	
* Eduard Glatter: Hygiene und Medicinal-Statistik. 衛生学と医事統計	2	金土 〔午前〕 12~1	小薬理学教室	2ヵ月コース H. 20fl.

教授：講義題目	回/週	時間	講義室	謝礼等
XI. Veterinärkunde 獣医学				
Moriz Röhl: Seuchenlehre und Veterinär-Polizei. 伝染病学と獣医事行政	3	月水金 午後4~5	大薬理学講義室	
Franz Müller: Vergleichende Anatomie der Haussäugethiere mit Demonstrationen. 家畜比較解剖学 (供覧共)	(2)	月金 午後 3~4	小薬理学講義室	
XII. Pathologische Chemie 病理化学				
* Florian Heller: Physiologische und pathologische Chemie und Mikroskopie. 生理・病理化学と顕微鏡検査法	5	午前 10~11	帝・王立総合病院 病理化学講義室 新遺体安置所	6週間コース H. 15fl.
—: Physiologische und pathologische Chemie und Mikroskopie. 生理・病理化学と顕微鏡検査法	3	月水金 5~6	同上	1学期間 H. 3fl. 15kr.
—: Praktische Übungen und Demonstrationen in der physiologischen und pathologischen Chemie und Mikroskopie, der qualitativen und quantitativen Analyse, in der Zoochemie und allgemeinen Chemie. 生理・病理化学と顕微鏡検査 (動物化学・一般化学における定性分析、定量分析) 実習及標本供覧	5	1日中	同上	H. 5fl. 25kr.

本表は *Öffentliche Vorlesungen an der k. k. Universität zu Wien im Sommer-Semester 1871.* Wien, 1871. pp. 1-22 より作成した、原資料の記載は下例ビルロートの項のとおりであるが、記載の順序、用語は必ずしも統一されていない。また、必要項目の記載を欠く場合もある。H. (月謝) の記載のない場合は空欄とした。また、講義題目は原文中の斜体部分のみとした。*は私講師。H. は M. H. と同様に「月」謝と思われる。() : 筆者補記。

Chirurgische Klinik mit Volesungen über specielle chirurgische Pathologie und Therapie, fünfmal wöchentlich von 9~11 Uhr Vormittags, von dem k. k. o. ö. Professor Herrn Hofrathe Dr. Theodor Billroth; im k. k. allgemeinen Krankenhause, Alserstrasse Nr. 4.

Über Krankheiten der Knochen und Gelenke, einmal wöchentlich, am Samstag von 9-11 Uhr Vormittags, von demselben; ebendasselbst. (Unentgeltlich.)

表 10

ウィーン大学医学部一八七二夏学期時間割表

月		曜日	時
アイエーガー 眼病病理学各論臨床 アイールト 眼病病理学各論臨床 アールト 眼病病理学各論臨床 ホフマン 腎臓病 シュエレル 獣医行政 メイネルト 精神病学臨床	ノイマン 皮膚病学 小兒病病理学各論臨床 ワイタートフアー 小兒病病理学各論臨床	7	オポルトツァ 内科病理学各論臨床 ドゥヘク 内科病理学各論臨床
		8	シユベティヒ 外科手術学 モージェティヒ 外科手術学 シユベート 助産法
		9	グルーバー 耳科学 シユレットター 喉頭鏡学 シユルツ 電気療法
		10	シユレットター 一般病理学 シユレットター 眼科学 ベネディクト 電気療法
		11	シユレットター 聴診打診 ミヒヤエル 医物理学 ブリュック 生理学
		12	ボリツツアー 実地耳科学 ポリツツアー 実地耳科学 ランガー 感覚・神経解剖学
		1	ゼリグマン 医学史 シユレーラー 小兒病
アイエーガー 眼科手術学	アイエーガー 眼病病理学各論臨床 コーン 梅毒 イラノア 梅毒臨床 ミューラー 家畜比較解剖学 ツァイスル 花柳病梅毒臨床	2	ビルトル 脳・神経解剖学 フリートロウアー 解剖学
		3	シユテルン 治療技術 ホルマン 腎臓病 ルーベ 臨床入門 グエトレ 顕微鏡学
		4	シエンク 人間生理学コース ロイス 補眼科学習学
		5	ドラスヒエ 内科病理学各論 フランク 婦人科 ドゥムライヒヤー 外科手術学
		6	マイルホーファー 外科産婦人科学
		7	ブライツツアー 小兒病外来臨床 コーン 梅毒 イラノア 梅毒臨床
		8	コーン 梅毒 イラノア 梅毒臨床 ミューラー 家畜比較解剖学 ツァイスル 花柳病梅毒臨床

火										曜日	時	
											7	
											8	シユレット 病 及 治療学
											9	シユレット 喉 打頭 診病
											10	シユレット 病一 理學 般
											11	シユレット 病 理學 般
											12	シユレット 病 理學 般
											1	シユレット 病 理學 般
											2	シユレット 病 理學 般
											3	シユレット 病 理學 般
											4	シユレット 病 理學 般
											5	シユレット 病 理學 般
											6	シユレット 病 理學 般
											7	シユレット 病 理學 般

水										曜日	時
										7	7
										8	8
										9	9
										10	10
										11	11
										12	12
										1	1
										2	2
										3	3
										4	4
										5	5
										6	6
										7	7

木							曜日	時
							7	
							8	シユレクター 及治療学
							9	シユレクター 喉頭鏡学 聴打診病
							10	シユレクター 病一般 理学
							11	シユレクター 眼病 理学
							12	シユレクター 眼病 理学
							1	シユレクター 胎生学 類
							2	シユレクター 小児病 史
							3	シユレクター 解 剖学
							4	シユレクター 解 剖学
							5	シユレクター 解 剖学
							6	シユレクター 解 剖学
							7	シユレクター 解 剖学

土										曜日	時
											7
										シユレクター 及病理学 治療学	8
										ヒルトル 解剖学	9
										ランガー 人体外形 解剖学	10
										パトルーパー 外科解剖学	11
										シユテルン 他覚症候学	12
										アウスビッツ 皮膚病 病理学	1
										クロープ 解剖学	2
											3
										フリードリクス 人体脳神経学予講	4
										クライン 組織学	5
											6
										マイルホーファー 外科産婦 人科学	7

日		曜日	時
			7
			8
			9
			10
			11
			12
			1
			2
			3
			4
			5
			6
			7

ヒルトル 解剖学	シエンク 胎生と 生殖器学	パトリバン 外科解剖学	アウスピッツ 皮膚病 病理学	ツイクモンディ 歯 手術 学科	ヴェルトハイム 皮膚病
ツエスナー 外科器具・包帯学	シユテルン 他覚症候学	フンク 女性性病			
デイッテル 前立腺病	ブブラウン 婦人科 学				
ヴェルトハイム 皮膚病学生 コース	コーン 梅毒 病理学				
シユラーガー 精神病学					
ノイマン 皮膚病学 生コース	アウスピッツ 梅毒 病理学				

『ウィーン大学便覧』一八七一年版⁽⁷³⁾と『開講講義一覽』一八七一年夏学期版⁽⁷⁴⁾とは一致しない点が若干見られるが、後者が時間的により現実の開講状況に近かった、と思われるので後者を主体に作表してある。

一八七一年夏学期の教育陣容は学部長ブラウン (Karl Rudolf Braun) 以下、教授二四名、私講師四九名。その綾なすカリキュラムは「前掲時間割表に見られるように、週七日間休日はなく、一日の授業は朝七時から夜七時半までの十二時間半に亙る。しかも、同一時間帯で複数の講義——例えば、午前十時から十一時の時間帯では、月曜日から金曜日までを通して、実に一一講義が開講されるという過密な編成である。(このほかにも、『講義一覽』に曜日指定などの必要項目の記載が不完全で、時間割表内に表示できなかった一六講義が尚、存在する)。

教授は一九名が主講義(一一二時間)を週五回以上こなし、更に内一二名は主講義の関連講義(一一二時間)を一内至五回行っている。四九名の私講師達は、内半数が週五回の講義(平均では三回程度)をもって、教授と同一時間帯で、或いは、間隙を縫って、同一内至類似の講義題目で挑戦する。所謂「教授の自由 (Lehrfreiheit)」である。

同一時間帯では一〇講義が行われるとして、大学の学年は第一から第五の五学年であるから、学年毎の水準差に応じて各講義が設定されているとしても、平均、一学年に二講義が競合することになろう。地位、名譽だけでなく、授講料という実利面もあり、教授、助教授、私講師の全てが「競争原理」⁽⁷⁵⁾に追われていたと推察される。

例えば、内科学では、オポルツァ、ドゥヘク両教授の「内科病理学各論臨床」、外科学では、ビルロートとドゥ

<p>I. Semester. Systematische Anatomie I. Theil, (6) Experimentalphysik I. Theil, (5) anorganische Chemie, (5) allgemeine Botanik, (3) anatomische Secirübungen. (6)</p> <p>II. Semester. Systematische Anatomie II. Theil, (6) Experimentalphysik II. Theil, (5) organische Chemie, (5) specielle Botanik, (3) Mineralogie, (5) praktische Anleitungen zu analytisch- chemischen Untersuchungen, (6) praktische Anleitung zum Gebrauche des Mikroskopes. (2)</p> <p>III. Semester. Physiologie I. Theil, (5) Histologie, (3) angewandte medicinische Chemie, (3) Zoologie, (5) anatomische Secirübungen. (6)</p> <p>IV. Semester. Physiologie II. Theil, (5) Entwicklungsgeschichte, (2) physiologische Uebungen, (2) histologische Uebungen, (3) medicinisch-chemische Uebungen. (6)</p> <p>V. Semester. Allgemeine Pathologie und Therapie, (5) Pharmakologie, (5) pathologische Anatomie I. Theil, (5) pathologische Histologie, (3) pathologisch-anatomische Secir- übungen, (3) praktische Anleitung zur physika- lischen Krankenuntersuchung. (5)</p> <p>VI. Semester. Pathologische Anatomie II. Theil, (5) specielle Pathologie, Therapie und Klinik der inneren Krankheiten, (10) specielle chirurgische Pathologie, The-</p>	<p>rapie und Klinik, (10) pathologisch-anatomische Secir- übungen, (3) pathologisch-histologische Uebungen. (3)</p> <p>VII. Semester. Specielle Pathologie, Therapie und Klinik der inneren Krankheiten, (10) specielle chirurgische Pathologie, The- rapie und Klinik, (10) Pathologie, Therapie und Klinik der Augenkrankheiten, (10) chirurgisch-anatomische Uebungen, (6) (chirurgische Operationsübungen). (6)</p> <p>VIII. Semester. Specielle Pathologie, Therapie und Klinik der inneren Krankheiten, (10) specielle chirurgische Pathologie, The- rapie und Klinik, (10) (Pathologie, Therapie und Klinik der Augenkrankheiten), (10) (chirurgisch-anatomische Uebungen), (10) chirurgische Operationsübungen.</p> <p>IX. Semester. Specielle Pathologie, Therapie und Klinik der inneren Krankheiten, (10) specielle chirurgische Pathologie, The- rapie und Klinik, (10) gynäkologisch-geburtshilfliche Vor- träge und Klinik, (10) gerichtliche Medicin, (5) (geburtshilfliche Operationsübungen), (5) gerichtlich-medicinische Uebungen. (2)</p> <p>X. Semester. Klinik der Kinderkrankheiten, (5) Klinik der Hautkrankheiten, (3) Klinik der syphilitischen Krankheiten, (3) (gynäkologisch-geburtshilfliche Vor- träge und Klinik), (10) geburtshilfliche Operationsübungen, (5) (gerichtlich-medicinische Uebungen). (2)</p>
---	--

ムライヒャー両教授の「外科病理学各論臨床」がある。前者には時間帯は異なるものの、私講師ドラシェが「内科病理学各論」で搦み、後者には、ディッテルの「外科病理学各論及び治療法」が同一時間帯にある。

又、主に私講師による開講期間を限定した集中講義も、一五、一〇、八、六、五、四週間と期間の長短はあるが、合計三五コースが配されている。従って、週末も昼休みもないカリキュラムとならざるを得ない。

又、各々の講義は大学内の講義室や帝・王立総合病院だけでなく、ヨーゼフ・アカデミー、帝国ルドルフ病院、聖アンネ小児科病院、衛戎病院、国立癲狂病院、果ては市内の浴場までを利用して、市内各所で行われていた。

学生達の市街の空間移動も「学習の自由 (Lernfreiheit)」を規制する条件の一つであったが、受講の自由を拘束したのは、何にもまして、各学期毎に履修すべき学科と週当りの時間数を定めた文部(宗務教育)省通達であった。前頁の表11は、ローレッツが正規生として第十学期(五学年)を了えた翌年の一八七二年に布達された「新口述試験法」(改正通達)中に見られる学科の学期別配当の例示である。⁽⁷⁶⁾ローレッツ在学時の配当例示は入手し得ていないので、その当時の法的基準の近似値として挙げておく(括弧内の数字は前掲通達に基づき補った時間数/週である)。

〔学位取得〕

一八七二年以来、オーストリアでは「新口述試験法」の施行によって、ドクトル学位取得試験の結果は各受験生に対し公に告示され、同時に全ての合格者の個人毎の記録⁽⁷⁸⁾——出生地、生年月日、所属宗派、卒業ギムナジウム、大学入学資格認定年月日を含めた——が、学部別、姓名のアルファベット順に記載された『総口述試験記録』に綴じられることになった。

今日、ウィーン大学文書館に保管されている『一八七二——一九四 総口述試験記録』中のローレッツの項⁷⁹には次の記載が見られる。

ローレッツ、アルブレヒト／フォン

ウィーン生一八四六・十二・十九 宗派カソリック

ギムナジウム・マトウーラ 於クレムジル一八六六・六・九

医学専攻 於ウィーン大学

第一次口述試験一八七二・五・十四 第二次口述試験一八七二・十二・四

内科⁸⁰ドクトル授与一八七二・十二・十一

第一次外科口述試験一八七四・七・二十四 第二次一八七四・七・二十五

外科ドクトル 一八七四・八・三

一八七二年以来ドクトル学位取得のための口述試験を受験するには、在学中に受講した必要課目毎の個別試験に合格して置く⁸¹ことが必要となり、又、学部長承認済みの臨床実習記録の提出が義務づけられていたことは、ローレッツの言にもあるが、恐らく、旧法時代から要求されていた必要条件であったと思われる。

口述試験は第一次が理論、第二次が実地である。実地試験とは、例えば外科ならば次の二種類から成る⁸³。

一つは、受験生は実際に病床に赴き、指定された患者を診断して、把握し得た病徴を詳論し、かつ、的確な治療法を陳述する試験であり、今一つは、受験生は屍体をもって手術を行い、手術部位の解剖所見を述べ、又、受

験生の選んだ手術法の技術と、その狙いとする所を説明する試験である。

ウィーン大学医学部では、ドクトル学位取得は専らこの口述試験によってのみなされ、一八四八年から九〇年間は、学位請求論文を提出する必要はなかった。従って、卒業時におけるローレッツの学問的到達度を知るに足る基本的資料——学位請求論文——は存在しない。又、在学時代の履修記録も残されていないので、ローレッツが誰の講義を聴き、どのような臨床実習を行ったかは、具体的に明らかにできない。しかし修学期間は、次頁のウィーン大学の年表(表12)に見られるように、正規生として五年間と外科学位取得までの三年近い研修期間とを加えると、最大七年半在籍したことになる。

ローレッツの両ドクトル学位取得の型がこの当時、標準的な型であったか、特異な事例であったのかは調査できていない。因みに、『ウィーン大学便覧』一八七一年版によれば、一八七一年のウィーン大学医学部教授二五名中、内科、外科の両学位を有したのはヨゼフ・ヒルトル、ヨハン・フォン・ドウムライヒャー、フェルディナンド・リッター・フォン・アアルト、テオドール・ビルロート、テオドール・ヘルム、カール・ヴェドル、エドアルト・イエーガー・リッター・フォン・ヤクスタール、カール・シュテルヴァク・フォン・カリオン、カール・セツスナー、ヘルマン・ツァイスル、モーリツ・フリードリッヒ・ロエールの一一名であり、私講師に至っては五七名中、四一名が両ドクトル学位の取得者である。

又、前掲『総合口述試験記録一八七二—九四』によれば、口述試験の間隔についても、内科については、第一次試験が第十学期終了から七ヵ月後、第二次試験は更にその六ヵ月後と一年余を費やしているのに対し、外科は僅か二日間で第一次と第二次を了えている。これはローレッツ個人に帰せられる何らかの理由があったのかも知れないが、ローレッツが内科の口述試験を受験した一八七二年は、医学部について新口述試験法が布達された年であ

表12

西暦	明治	年 齢	学 期	学年	身分	事 項
1866		1846.12.19生 20				10月頃ウィーン大学医学部入学
1867		21	10月 3月	1	正	
			4月 9月	2		
1868	1	22	10月 3月	3	規	
			4月 9月	4		
1869	2	23	10月 3月	5	生	
			4月 9月	6		
1870	3	24	10月 3月	7	規	
			4月 9月	8		
1871	4	25	10月 3月	9	生	9月頃正規生として10学期終了
			4月 9月	10		
1872	5	26			非	5月14日 内科学位第1次試験 12月4日 同上第2次試験 12月11日 内科学位授与
1873	6	27			規	
1874	7	28			生	7月24日 外科学位第1次試験 7月25日 同上第2次試験 8月3日 外科学位授与

る。当時のオーストリア諸大学では、口述試験の実施、ドクトル学位の授与が、混乱、停滞していたという実情が、その背景にあったのかも知れない。とすれば、ローレッツの場合、同年五月十四日の第一次試験の僅か二週間後、六月一日付けをもつて新口述試験法が布達されたため、大学側で種々の対応策が講ぜられ、結果として第二次試験が十二月四日と大幅に遅れた、という時を追った単純な推測も成り立つが、結論は差し控えたい。

更に、一八七二年十二月十一日の内科ドクトル学位授与から、一年半後の一八七四年八月三日外科ドクトル学位授与までの期間を、具体的に説明できる直接的な資料も見出し得ないでいる。前掲『ウィーン大学開講講義一覽』受講料の項に、「医学部生一〇フロリン」「学位受験生五フロリン」とか、「学生五フロリン」「医師一〇フロリン」などの記載が見られることから、各講義は正規期間(第一—十学期)の在学生のみを対象としたのではなく、正規五年間の修了者や市井の医師に対しても門戸を開いていたことがうかがわれる。ローレッツも外科ドクトル学位の取得に備えて、最低、ビルロート、ドウムライヒャー両教授の講義、臨床実習は無論、私講師何人かのそれらも学位受験生として受講した筈である。前述した口述試験法の改正によって、必須課目の受講とその課目毎の試験合格、それに規定回数以上の臨床実習記録——学部長の確認サインを要した——の二つの必要条件を満たさないと、学位取得試験の受験資格が与えられなかったからである。

ただ、ローレッツにとっては、この一年半の外科研修は正規五年間コースの延長線上にあり、兵役義務の消化などがなければ、必要講義の履修も比較的容易であった、と思われる。又、この卒業後の内科、外科学位取得に至る三年程の期間は、序節で触れたようにローレッツが「本國政府ノ命ヲ受ケテ」「英佛諸國ニ遊學シ」「大約三十ノ癡狂院ヲ訪ヒ」得た時期としては最も可能性が高い。

結語

ローレツは一八四六年十二月十九日出生した。生地ウィーンと言う記録にはやや疑念が残る。幼児期、小学校期の資料は現時点では皆無である。

在校したギムナジウムは第四級生までカルクスブルク、第五級生からはクレムジルのそれである。マトゥーラは一八六六年九月に終えた。卒業認定書の成績からは、自然系諸科目、ラテン語、哲学が優秀であったことが判明したが、評価用語を正確に解釈するためにはクレムシル・ギムナジウム史の解明が必要となる。

ウィーン大学の記録により、ローレツは一八六六年冬学期より一八七一年夏学期まで一〇学期五年間正規生として在学し、一八七二年十二月十一日には内科学位を取得、一八七四年八月三日には外科学位を取得した事実が明らかになった。ローレツ個人の履修記録はなく、又、ウィーン大学医学部には学位請求論文提出制度が当時敷かれていなかったため、その学習・研究水準は確かめられないが、ウィーン大学が毎年発行した『大学便覧』『講義一覽』により、当時の教授、私講師の全容と、各自の行う講義題目、曜日、時間、講義室、月謝は判明する。

一八七一年夏学期の講義一覽と復元時間割表とを例示した。ローレツは内科、外科の両学位を取得しているが、それだけに全般に亘って受講したと思われる。ローレツの在学した時期は新ウィーン学派の全盛時代であり、ロキタンスキー、スコーダ、ヘブラ、ビルロートら医学史上の巨星の講義をローレツが無視したとは考えがたい。

ローレツの手がけた、愛知県公立医学校のカリキュラム改革は当然、ウィーン大学で自己の体験したカリキュラムが影響したであろうし、ローレツが公立医学校で行った講義には、恩師教授から得た知識が直接間接に反映したに違いない。この節で把握し得た限りではあるが、ウィーン大学医学部カリキュラムを篩とし、更には、本学医学部の図書館が保有する公立医学校時代の蔵書の検討をも加味しながら、第二節以降でこの問題を取り扱う

うとする。

(以下次号)

注

- (1) 一八八二年、日本を去り帰郷したローレツは、ウィーン市外北方の山麓ジーベリントグ(Sievering)にあった古城ヒンメル(Himmel)を改修したサナトリウムの病院長であったが、一八八四年七月二十日、心臓マヒのため急逝した。三十七歳。結婚後僅か六ヵ月であった。依：「Dr. Albrecht von Roretz (1846-1884), ein österreichischer Arzt in Japan」/ Erich Rabl. (Sonderdruck aus *Höbbarth zum 30. Todestag, 1982: Gedenkschrift der Stadtgemeinde Horn*... / Hrsg. von Ingo Prinhata Horn 1982) p. 51.

- (2) “Die medizinischen und hygienischen Verhältnisse Japans. Dr. Roretz.” (*Wiener Medizinische Wochenschrift*, Vol. 33 Nr. 1, 1883) 16-17 col.

原文は間接表現の報告記事であるが、直接的表現に意識した。又、文脈も日本語として違和感のない程度に改めた。

- (3) ローレツのファースト・ネームは従来「アルベルト」と誤伝されて来た。これは『外国人雇入取扱参考書』等(原本コピー：小形利彦提供)などの公文書の記載が、「アルベルト」「アルベルト」「アルフレット」「アルブレヒト」と、これで同一人かと思われる程多様であり、その中で日本人にとって最も耳馴れた「アルベルト」が定着したのか、誤伝のまま、ほぼ一世紀を経た。一九七一年、山形の佐々木仁一はオーストリア大使館の回答を手懸りとして、ホルン市フリートホーフ墓地内のローレツ家の墓に詣で、Albrechtであることを確認した。佐々木が時々吹雪く「チェコ風」^{オロン}の中で採った拓本には次の碑文が浮き出ている。依：『没後一〇〇年記念誌 Dr. Albrecht von Roretz』／編・発行 小形利彦 一九八四 扉写真

Dr Albrecht von Roretz

Hospitals Director und Professor

an die Schule für Medicin u. Chirurgie

1846 in Japan 1884

(以下、略)

尚、本学に遺された自署五点は何れも、Alb v Roretz の省略

形で、「阿爾麥 笨 老烈」はその漢字表記である。又、Roretz の片仮名表記には、「ローレッツ」「ローレツツ」二様の表記がある。Roretz の前音節 Ro にアクセントを置けば、「ローレツ」、後音節 retz にアクセントを置けば、「ローレツツ」となる。老烈は前者に近い。(図Ⅷ)

(4) 『ホルン紀行』 / 佐々木仁一 やまがた豆本会 昭和四十六年 (やまがた豆木 第三冊)

『ローレッツの生地を訪ねて』 / 小形利彦「著、発行」 昭和五十九年

(5) 前掲 *W. M. Wschrift. Vol. 27 Nr. 19 1877 pp. 351~352, 457~459.*

翻訳としては、「外国人のみた明治十年頃の日本の医学校(下)——愛知医学校の場合——」 / 小関恒雄 北村智明 H・フィアンデン (『日本医事新報』 No. 三二八八) 六六——六九頁

(6) この段落前半は『自明治六年至同十三年 愛知縣公立病院及醫學校第一報告』 / 「石井榮三 瀧浪圖南編纂」 明治十三年序に依っている。

(7) 「……教師老烈氏病床講義及ヒ治驗或ハ毆米ノ醫籍及ヒ諸種ノ新聞等ニ就テ大ニ刀圭ニ切要ナル事件ヲ抄譯編纂」することを目的とした。第一——一〇号までは独乙医事誌の抄録や、症例報告をその内容としたが、第一一号(明治十二年九月識)より創

図Ⅷ

刊の辞で訛ったローレッツ講義録の連載が始まる。森家旧蔵本は同家の篤志を得て昭和六十二年十二月、当医学部の図書館史料室の架蔵する所となったが、残念ながら、第一二号と第五一号以降を欠く。しかし、愛知県立医学専門学校校友会旧蔵本中に、『醫事新報』に連載された「斷訟醫學」部分を全て収録した一冊本、『斷訟醫學』（明治十八年八月刊 非売 全四九七頁）が在り、欠落部分については次のようであることが判明している。頁数は全収録本のそれである。

第一二号 通論後半「斷訟醫學士ノ自家ノ職分ヲ竭ス……」計一四頁強。

第五一号以降 第六編中の「小兒固有ノ損傷ニシテ大人ニ之レナキ者ハ左ノ如シ」及び、

第七編「斷訟醫學上醫事検査之論」の計五三頁

又、今一本、この講義の筆写本コピー（岡田靖雄提供）を当館は保有しているが、活字本とは相当異同がある。尚、活字本の序論で項目に挙げながらその叙述を欠く「裁判上中毒的殺傷検査」の「通論」が見られる。

- (8) 「御雇教師ローレッツによる断讼医学講義」／小関恒雄（『日本法医学雑誌』四四卷一号）三一—三六頁
「ローレッツの断讼医学講義における精神病について」／安井広（『医譚』通卷第七〇号）三一八九—三一九三頁
- (9) 「4 ローレッツの顕微鏡学」／藤野恒三郎（『日本細菌学史』／藤野恒三郎）五一—六四頁
「山形済生館時代のローレッツとその講義録」／解説小形利吉（『山形市史資料』第四十七号）
- (10) 「松沢病院外史」／金子嗣郎 日本評論社 一九八二（からだの科学選書）六五頁
- (11) 「私説松沢病院史——一八七九—一九八〇——」／岡田靖雄 岩崎学術出版社 一九八一 四七—五九頁
「我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設」／吳秀三 精神医学神経学古典刊行会 昭和五十二年 一三四頁
- (12) 前掲『私説松沢病院史』 三二頁
- (13) 前掲『私説松沢病院史』 六七—六八頁 『醫事新聞』第三十四号（明治十二・十二・五）記事
- (14) 前掲『私説松沢病院史』 六八—六九頁
- (15) 前掲『私説松沢病院史』 第三章、第四章 三〇—六六頁
- (16) 前掲『私説松沢病院史』 第三号、第四号 三〇—六六頁
- (17) 前掲『私説松沢病院史』 第三号、第四号 三〇—六六頁
- (18) 「附 日本に於ける精神病学の日乗」／櫻田五郎（『本邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設』）一七九頁

- (19) 前掲『我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設』 八六頁
- (20) 前掲『私説松沢病院史』 一三五頁及び口絵一四
- (21) 前掲「附 日本に於ける精神病学の日乗」 二〇一頁
- (22) 『精神科治療学』I 中山書店 一九七八 (『現代精神医学大系』／編集代表 懸田克躬 第五卷A) 二二二—二五頁
- (23) 前掲『愛知縣公立病院及醫學校第一報告』 一二二頁 明治十二年一月二十二日 愛知縣令安場保和宛「愛知縣癲狂院設立」建議
- (24) 同右 一二七頁
- (25) 『自明治十一年至廿年 外国人叙勲雜件塊洪(マヤ) 国人ノ部一』の内、澳國人ドクトルフォンローレッツ氏履歷 愛知縣令國貞廉平「一丁ウ
- (26) 前掲『我邦ニ於ケル精神病ニ関スル最近ノ施設』 四六頁「……ローレッツ獨英佛等諸國ノ築造ヲ參酌シテ我邦ニ適スル様設計築造セシモノニ係リ當時我邦府縣ニ未ダ會テ有ラザリシ……」
- (27) 『青きドナウの乱痴氣——ウィーン一八四八年』／良知力 平凡社 一九八六
- (28) 『特命全權大使 米欧回覽実記』／久米邦武編 田中彰校注 四 岩波書店 一九八五 三八九—三九〇頁
- (29) 『ウィーン精神——ハープスブルク帝国の思想と社会 一八四八—一九三九』／W・M・ジョンストン 井上修ら訳 I みすず書房 一九八六 五七頁
- (30) 'Geboren in Wien am 19. Dez. 1846.' (『総合口述試験記録一八七二—一九四』)
- (31) 前掲“Dr. Albrecht von Roretz” / Erich Rabl. 49. p.
○同右
- ウィーン大学文書館(Archiv der Universität Wien) マグネス・ケッスル(Agnes Kössl)筆者宛書簡の一部
‘...Vater: Albrecht, k. k. Hauptmann “todt”, Vormund: Graf Breda, Senatspräsident ...’
- (32) 前掲“Dr. Albrecht von Roretz” / Erich Rabl. p. 49.

- (33) 前掲『ホルン紀行』 四六一—四八頁
- (34) *Von Schloss zu Schloss in Österreich* / Gerhard Stenzel. wien, 1976.
- (35) 前掲『ローレンツの生地を訪ねて』 四—頁
- (36) (一) v. Roretz Albrecht ‘… Wien in Nied-Oesterr. am 19. Dec. 1846 geboren …’ (Verzeichnis derjenigen Schüler, welche die Maturitäts-Prüfung im Jahre 1866 …) (Archiv Kroměříž)
 (二) Roretz, Albrecht von ‘Geboren in Wien am 19. Dez. 1846 …’ (Archiv der Universität Wien : *Hauptrogosenprotokoll 1872-94*)
- (37) 『西洋教育史』 / 長尾十三二 東京大学出版会 一九七八 一六四頁
- (38) “Verzeichnis jenen Schüler, welche die Maturitäts-Prüfung in Jahre 1866 gemacht haben.”
 v. Roretz Albrecht
 Athanas Mayer Director.
 ‘…hat die Gymnasial-Studien vom Jahre 1859 bis 1862 zu Kalksburg in Nides Oestereich…’
 表6に見られるように、この一八五九とは一八五八／五九学年度の意である。
- (39) “Perspective-Karte von Niederösterreich. Sektion II” / Von Franz Xaver Schweikhardt von Sickingen. Im *Die Entwicklung der Stadt bis in die Mitte des 19. Jahrhunderts* / Ferdinand Opll. Wien : Böhlau, 1983. (Wien im Bild historischer Karten) Tafel 42.
- (40) 前掲『ウィーン精神』I 一〇—一〇二頁
- (41) 前掲“Verzeichnis jenen Schüler…” v. Roretz Albrecht
 ‘…vom Jahre 1863 bis 1866 am k. k. Gym[nasium] zu Kremsier absolvfert und…’ 一八六三は正確には一八六二／六三学年度の意。
- (42) 前掲『ウィーン精神』I 三四六頁
- (43) 前掲『ウィーン精神』I 一〇二—一〇三頁

(44) 前掲『ウィーン精神』I 一〇頁

(45) ローレックが卒業したギムナジウムの名称は、前掲“Verzeichnis jenenen Schüler …”では単に k. k. Gymnasium zu Krennsier であるが、ギムナジウムの発行したプログラムでは、一八七六年版は Das Staats-Gymnasium in Krennsier 一八八四年版は Das k. k. deutsches Staats-Gymnasium in Krennsier 一八九二年版は Das kais. kön. deutsches Staats-Gymnasium in Krennsier と一様ではない。(以上三版が筆者の入手できたクレムシル・ギムナジウムのプログラムの全てであり、ローレック在校時のそれは、今日、クロメーシシュ文書館にも保管されていない)。表1以下、プログラム関係の引用や典拠は何れも一八七六年版 *Programm des Staats-Gymnasium in Krennsier veröffentlicht am Schlusse des Schuljahres 1876*. Selbstverlag des Staats-Gymnasiums, 1876. (本学附属図書館中央図書館長谷川文庫蔵) に依った。

(46) 本学の歴史を物語る史料としては最も著名であり、医学史関係の写真集、図書、論文中に度々、紹介されているので写真は割愛した。概略については、拙稿「明治初年愛知県公立病院外科手術の図」(『名古屋大学学报』第二九三号 昭和六十三年)三頁を参照されたい。

(47) 写真では判読できない下段は、在校生徒名と次の添書である。

明治十三年四月十三日臨別得辱教頭老烈氏遺箴辭短意遠矣生等謹師其辭之意他日將大有所為

(48) *Gesta Romanorum* / von Hermann Oesterley. 2. Nachdruckaufl. der Ausg. Berlin 1872. Hildesheim : G. Olms, 1980. 31p. Cap. 103.(95.) De omnibus rebus cum consensu et providencia semper agendis. 以下 *Quidquid agas, prudenter agas, et respice Finem.* と文体はヤル異なる。

(49) 『ドイツ文学事典』／日本独文学会 河出書房 昭和三十一年 一〇一八頁による。又、第一寓話の抄録は *Gesta Romanorum*, or, entertaining moral stories ... / Trans. from the Latin ... ; rev. and corrected by Wynard Hooper. Reprinted from the ed. of 1894. AMS Press, 1970. pp. 177-180. Tale CIII OF DOING ALL THINGS WITH CONCORD AND FORETHOUGHT. に依った。

(50) 前掲一冊本『断讼醫學』第二編各論 裁判上精神學ノ實際ヲ論ズ 一八五頁

又色欲ノ爲メニ古來帝国ニ於テハ戦争ノ起リシ「有リ故に羅罵ノ一詩人曾テ唱ヘシ」アリ其詩ニ曰 ヤム、フリート、アント、ヘレナム、コンヌステテリーマ、ヘルリ、カウサ……

- (51) 前掲一八七六年版プログラム 二四―二五頁
- (52) 同右 二七頁
- (53) 前掲『ウィーン精神』I 一〇〇頁
- (54) 『フロイト著作集八 書簡集』／生松敬三他訳 人文書院 一九七四 五―六頁
- (55) 原本の写しはクロメージシュ文書館の提供。原本ではイタリック以外の部分は全て筆記体である。「」は判読不能部分。原本全体のタイトルは次のとおり。

Verzeichnis

derjenigen Schüler, welche die Maturitäts-Prüfung in Jahre 1866
im Jahre 1866 gemacht haben.

Athanas Mayer []

Director

- (56) *Sigmund Freud, Briefe 1873-1939* / ausgewählt u. hrsg. von Ernst L. Freud. Frankfurt a. M. : Deutsche Rechte im S. Fischer Verlag, c1960. p. 5.
- (57) *Arthur Schnitzler ; sein Leben und seine Zeit* / Hrsg. von Heinrich Schnitzler, Christian Brandstätter u. Reinhard Urbach. Frankfurt a. M. : S. Fischer, c1981. p. 29.
- (58) 前掲“Dr. Albrecht von Roretz” / Erich Rabl. p. 52.
- (59) 前掲書簡(ウィーン大学文書館 マグネス・ケッセル筆写宛)
'Albrecht von Roretz ... war an der ho. Medizinischen Fakultät vom Wintersemester 1866 / 67 bis zum Sommersemester 1871(zehn Semester) als ordentlicher Hörer inskribiert (Nationalien der Medizinischen Fakultät der Universität

Wien)

- (60) 前掲『米欧回覧実記』 三八九頁
- (61) 『世紀末ウィーン政治と文化』／カール・E・シヨースキー 安井琢磨訳 岩波書店 一九八三 四四—六六頁
- (62) *Taschenbuch der wiener k. k. Universität für das Jahr 1867 / von ... Ernst Edlen v. Scheidlein.* Wien : K. k. Universität [1867] pp. 144-161. C. Medicinische Facultät.
- (63) 『近代医学の史的基盤』／川喜田愛郎 下 岩波書店 一九七七
- (64) 同右 六〇六—六一八頁
- (65) 同右 六六一頁
- (66) 同右 六一六—六一七頁
- (67) 同右 六二七頁
- (68) 同右 九六三—九六四頁
- (69) 前掲『ウィーン精神』I 三三八—三四八頁
- (70) 『精神医学総論』I 中山書店 一九七九 (現代精神医学大系／編集代表 懸田克躬 第一卷A) 五九頁
- (71) 前掲『ウィーン精神』I 一〇七—一〇八、三三八—三六三頁
- (72) ウィーン大学医学史研究所 スコーパク (M. Skopec) 筆者宛書簡
- (73) *Taschenbuch der wiener k. k. Universität für das Jahr 1871 / Hrsg. von Ernst Edlen v. Scheidlein.* Wien : Verlag der k. k. Universität, 1871. pp. 58-79. Medicinische Facultät.
- (74) *Öffentliche Vorlesungen an der k. k. Universität zu Wien im Sommer-Semester 1871.* Wien, 1871.
- (75) 『ドイツ大学への旅』／潮木守一 リクトルト 昭和六十一年 七六—九六、一七〇—一七三頁
- (76) 同左より「新口述試験法」と略記した。

”Erlass des Ministeriums für Cultus und Unterricht vom

1. Juni 1872, Z. 6726

mit welchem den medicinischen *Professoren-Collegien* zu Wien, Prag, Krakau, Graz und Innsbruck die Instruction zur Ausführung der Rigorosen-Ordnung für die medicinische Facultät, sowie-Bestimmungen über die Einrichtung des medicinischen Unterrichtes nach Massgabe der neuen Rigorosen-Ordnung mitgetheilt werden.”

In *Sammlung der für die österreichischen Universitäten gültigen Gesetz und Verordnungen*. 2. umgearb. Aufl. / redigirt von Friedrich Freiherrn von Schweickherdt. Wien, 1885. pp. 522-537.

(77) 同右 五三二頁

(78) 同右 五二五頁

(79) 『総合口述試験記録 一八七二—一九四』

Archiv der Universität Wien : *Hauptrigorosenprotokoll / 1872-94*.

Roretz, Albrecht von

Geboren in Wien am 19. Dez. 1846. Kathol. Religion.

Matura am Gymnasium in Kremsir am 9. Juni 1866.

Medizinstudium an der Wiener Universität

1. Rigorosum am 14. Mai 1872, 2. Rigorosum am 4. Dez. 1872

Promotion zum Dr. med. am 11. Dez. 1872

1. chir. Rigorosum am 24. Juli 1874, 2. am 25. Juli 1874

Dr. chir. am 3. August 1874

原本ウィーン大学図書館蔵、ウィーン大学医学史研究所よりコピー提供。

(80) *Medicin* は外科学 *Chirurgie* が学として確立した時から内科学 *Inner Medicin* を限定して意味するに至った、と説く川喜田

の前掲『近代医学の史的基盤』の見解に従った。因みに、本文中の表9「講義題目一覧表」において、各講義がどのように大別され、Medicinの項で具体的に何が講せられたかを参照されたい。

(81) 前掲「新口述試験法」 五三五頁

(82) 長谷川泰宛書簡「澳土利國維也納醫制」／愛知縣病院教師ローレツ氏取調(訳稿) 四丁オーウ

……臨床授業用患者ヲ以テ生徒ヲ教育スルノ方法ニ就テハ各生徒ハ一人ノ患者ヲ擔當シ毎日其疾病ノ症状經過体重温度脉搏呼吸處方箋及ヒ手術等一切明瞭ニ記録シ之ヲ綴集シ置キ其期ノ終リニ放テ教頭ノ捺印ヲ乞ヒ他日卒業試験ニ際シテ之ヲ教頭ノ面前ニ致サシメ以テ医術實際演習ヲ經過セシノ證トス……

(83) 前掲「新口述試験法」 五三五頁

(84) 前掲アグネス・ケッスル筆者宛書簡、及び、前掲『総合口述試験記録』により作表した。

※ 引用文中の文字は、印字可能な限り原字を覆刻したが、単純な誤字(イ と ィ との誤りなど)や、印字困難な異体字は正字に翻刻した。

※ (一)で処理できない場合はママと添字した。

※ 文献の表示方式は「国際標準書誌記述」を採っている現行の目録規則(和・洋)に準拠した。従って、書名／著者 出版者 出版年 頁数の形式となる。尚、書名については、和書・誌名「―」、洋書・誌名はイタリックで表した。又、和論文名は「―」、洋論文名はダブル・クォーテーションで括った。

※ 地文、注記中の引用文・語句は和「―」、洋「シングルス・クォーテーション」で括った。前、中、後略はスリー・ドット一内至二箇で表した。

(たなか ひでお 附属図書館医学部分館)